

本州日本海沿岸北部における縄紋時代後半期の宗教儀礼

— サケをめぐる考古学的事象と民俗（族）誌 —

小林 克

要旨 縄紋文化の東あるいは北日本の優位性を説明する仮説に、いわゆる「サケ・マス論」がある。この「サケ・マス論」成立の一つの背景を担ったと考えられる遺物に「サケ石」がある。一時はキリシタン関連の遺物との疑いがもたれたこともあるが、現在ではその立地等から遡河性のサケ・マス類の捕獲に関わる儀礼痕跡と考えられている。その「サケ石」発掘の成果を考え、近年に発見例の追加が顕著なサケ科遺存体の出土状況を確認し、それらが焼けて出土する状況を北米北西海岸インディアンの民族誌、特にその神話とそれによって意味が与えられる儀礼との比較で考えた。また、列島の民俗誌においても同様の視点で伝承の分布との対応関係を考え、さらに「サケ石」の絵画的表現とは別に魚形の立体表現をもった石製撲殺兵器、「異形石棒」および「青竜刀形石器」の分布と照合し、民俗誌から導かれるサケに関わる儀礼の意味を縄紋文化のなかで考え得るか検討した。

I はじめに

筆者が生まれ育ったのは秋田県南部を流れる雄物川中流にある町である。北から流れ下る玉川との合流点にほど近いその町では毎年10月も末近くになると、雄物川の川岸の原に“ナヤ”と呼ぶ藁葺きの小屋が建てられるならいだった。その時期を境に上るサケを捕るため、川に仕掛けした網漁の漁人達が寝泊まりする小屋である。年を越え漁が終わった次の春には跡形もなく消えてしまう、そしてまた秋には新しい稲藁で建てられる、その繰り返しを記憶している。その頃の自宅奥の台所には、羽釜を据える薪焚きの竈があった。その竈の煤で薄汚れた板壁には、なぜかサケの尾鰭が数枚貼り付けてある。何のまじないだったのか、家人に聞いてもわからない。年ごとに尾鰭は増えたようにも思えるし、何時しかそれもなくなったように思える。

雄物川では毎年サケ漁が盛んに行われていた。明治18年には玉川との合流点周辺（後の神宮寺村）の捕獲が、計7,672尾に及んだことが記されている（神岡町 2002）⁽¹⁾。また、江戸期にはさらに盛んな様子が伝えられている。久保田藩三代佐竹義処は江戸中期の寛文13（1673）年から元禄13（1700）年までの3回、雄物川沿い大曲の網打ちを見物した（深沢 1971）。さらに後の文化年間には九代佐竹義和が義処にならい、雄物川上流羽後町にある三輪神社に焼いた塩サケを奉納したことが記されている（佐竹義和 1811）。佐竹氏の元での雄物川のサケ漁は毎年秋に繰り返される風物詩の域を超え、藩主自ら見物し儀礼を執り行うほどにあげての行事だったようだ。そして江戸

後期に秋田を旅した紀行家、菅江真澄は文政9年（1826）年の記録としてその起こりに関し修験に連なるかのような伝えを書き残している。

「…神宮寺本郷の事 當郷に仙臺子と申候て、鮭網を拵漁り致候…仙臺より参候とて旅僧の来りて、此鮭網を拵候て鮭漁り候事を教へ候より、…これゆえへに、鮭漁り候者をこの辺仙臺子と申唱候云々 秋田御領鮭網の始まりの村の由…」（内田・宮本 1978）

藩主が直に見物し儀礼を執り行うほどの行事には、由緒を伝えてしかるべき傳説までが備わったということであろうか。

こうしたサケ漁の記録は無論秋田のみではなく、現在なお盛んな日本列島各地に多かれ少なかれ残るものであろう。習俗もまたしかりである。少なくとも筆者が育った頃まで見られたまじないに似た行為もまた、生態的環境に応じた文化的適応として各地に、ことに東北・北陸地方の日本海側にあったのではないかと。そしてそれは、例えば縄紋文化論に著名な「サケ・マス論」（山内 1964・1969）に連なる伝統として存在したのではないかと。

Ⅱ サケ石

1 発見と評価

秋田県南部を流れる河川に雄物川に加えてもう1つ、山形県境烏海山北麓を流れる子吉川がある。この子吉川沿い矢島町にある前杉遺跡で「サケ・マス論」成立の背景をうかがわせる遺物、サケ石が発見されたのは昭和6年のことだった。当時、秋田考古界の重鎮だった深澤多市のもとへ入った知らせは自身調査の写真とともにかねて親交のあった東北帝大、喜田貞吉へと伝えられた。喜田は直ちに自らの考えをまとめ、『秋田考古会誌』に論考を寄せた（喜田 1931）。

既に近世には菅江真澄が雄物川支流役内川を上った、秋ノ宮稲住の同種の石の記録を残していた。「取上石といふ路のべに魚形石あり、こはむかし徳巖の弟子なる小法師童の戯れに彫りつけたりといへり」（内田・宮本 1975）。真澄は、岩手県江刺郡黒石村（現奥州市）正法寺の僧、徳巖が開いた禪林の小僧がいたずらで描いたという伝えをそのままに記した。各地を旅し縄紋土器を含む多くのスケッチを残し、例えば現在亀ヶ岡式土器として認識される土器に対してはその製作者を「いにしえ蝦夷」と推定するなど（関根 2006）、一定の見識をもって出土物を観察し得た真澄だったが、魚形が描かれた奇石に注目してはそれを古い時代の製作とは認めることはなかったわけである。

この秋ノ宮稲住のサケ石は前杉遺跡での発見に先立ち大正年間に再発見されたのだが、真澄に対し喜田は両者をまさしく石器時代の描画として扱った。そして、その意味するところを「…（筆者註：魚類を含め）獣類に対して、其食用として生命を人間に捧げしめる償ひとして、或る種の供養が人間によって行われた」ことを示す「供養碑」とした。その推測の背景には、各地にあった魚供養の卒塔婆や儀礼、そして魚以外の鹿など獣類の岩画 petroglyph やシシ踊りなどの

儀礼がある。「石器時代人は、狩猟漁業に活きた民衆であり」、その食料としては「獣類では鹿、熊、猪など、魚類では鮭、鱒などがおもなものであった事を疑わぬ」と喜田は強い調子で主張した。その背景には「狩猟漁業に活きた」石器時代文化が地域によっては民俗文化と共通しているお残り、発見しているはずとの見通しがあった⁽²⁾⁽³⁾。

深澤の調査、そして喜田の論文の後、このサケ石に眼を向けたのが武藤鉄城だった。武藤は淡沢敬三のアチック・ミュージアムの活動として行った漁撈民俗調査の一環で、発見8年後の昭和14年に前杉遺跡、そして稲佐のサケ石を調査する(武藤 1940)。東北帝大奥羽史料調査部に嘱託として在籍した経験をもつ武藤は喜田の薫陶を受けた関係にあり、いわばこの調査は恩師の研究を引き継いだものだった。そして奇しくもこの年は喜田の没年にあたった。武藤の分析は「魚形彫刻(はこく)石と供養碑」として地元紙に発表された(武藤 1939)。その帰属する時代に関係しては、石の刻みが金属一すなわち「タガネ彫り」—ではなく、武藤の用語で「鱧(やすり)刃」の「石小刀」を用いた刻み一すなわち「彫刻」—であるとの論を、石器研究で培った独特の視点で展開した(小林 2010)。喜田の主張した石器時代説の支持だったが、しかし、その一方で喜田が立論の背景に導入した民俗例、「供養碑」説に対しては、描かれた魚形の位置や方向からそれが立てたものではなく、当初から描画面を上にし現地に横たえられていた、とこれも独特の観察眼で退けた。民俗と関わって時代や意味を考証した喜田に対し、武藤は考古学的な資料観察を徹底した結論に達した。

考古学的な観察でサケ石が立っていたことを否定した武藤だったが、一方で、喜田のあげた民俗がどのように残っているかの確認も怠らず、県内三箇所に残る「供養碑」「供養塔」例を記述している。そして比較の評価として、犠牲となった生き物の霊を弔う目的の「供養碑」よりも豊漁を祈願する予祝的な儀礼の結果の遺物ではないか、と考えた。

サケ石の発見はその後前杉遺跡のある矢島町、あるいは北秋田郡阿仁で追加されていった。昭和27年には矢島町大谷地、28年には同町針ヶ岡、29年には阿仁の根子、そして30年には再び矢島町根城と続き、はるか遅れて平成元年に同町龍源寺境内でも発見された(小林 2009)。龍源寺を除く各例について、武藤は最晩年に再度の発表を行うがそこでも供養か予祝かを簡単に論じている(武藤 1956)。しかし、このときにはかつての喜田の「供養碑」説を強く否定する姿勢は認められない。この発表の3年前に後述する前杉遺跡の発掘を実施しその報告をなすが、その「むすび」には戦後の考古学研究のなか、大湯環状列石調査の参加以来大きな比重を占めることになる、石器時代墓地としての祖石ないし積石遺構への関心が述べられている(武藤 1954)。「供養碑説」の肯定とまではいわずとも、何かしら石器時代人の死生観に関わる特別な観念が表される遺跡、サケ石をその一部として見る方向へ導かれていた。

2 キリシタン遺物の疑い

菅江真澄による寺の小僧の戯作説は喜田によって否定され、武藤も石器時代遺物とする見方で

同調したのであるが、これとは別に武藤の調査に前後してキリシタンが残した遺物ではないかとの疑いも議論されていた。

南山大学で民俗学を講じた田北耕也は、長崎五島列島での隠れキリシタンの民俗を論じるなか、「宗教的集會に必ず魚を用いることは黒崎・五島地方にも共通の事実である。（中略）…潜伏キリシタンのこうした魚食の事実にはローマの迫害時代にキリスト信者が暗号として用いた魚の文字又は絵と、何等かの関係があるか否か。秋田県由利郡矢島町前杉、及び福井県大野郡遅羽（おそは）村傍崎部落後方面山の中腹に自然石に魚の形が彫り込まれてあり、キリシタンの遺跡らしいとの報告を得ている」（田北1954, p220）と、キリシタンが残した遺物である可能性に言及した。「ローマの迫害時代にキリスト信者が暗号として用いた魚の文字又は絵」とは「イクトゥス」と呼ばれる魚形記号であり、前杉遺跡と並んで引用された「福井県大野郡遅羽（おそは）村傍崎部落後方面山」とは、縄紋時代中期後半から後期前葉の配石遺構で知られる勝山市三室遺跡であるらしい⁽⁴⁾。この田北の発言に対し、武藤は前述の最晩年の論文で反論した（武藤1956）。

一方、田北と同じく南山大学に籍を置いた先史考古学者でありドイツ神言会の神父だったJohannes Maringerもまた、武藤の調査直前に前杉遺跡を含む秋田県内の「サケ石」を調査し、帰国後にその評価を発表した（Maringer, J. 1960）。Maringerは矢島の前杉、大谷地、針ヶ岡、根城、そして秋ノ宮稲住、阿仁根子に加えて二ツ井七座の例をあげ、それらが縄紋時代の中期から後期に属するであろうことを武藤の調査報告を引いて述べ、描画の技術や魚形の分類にも論及した。そして、それらが内陸河川近くで見つかることから、当時に重要な食料だったサケに対する感謝の意味で作られ、その伝統は北海道および樺太やアムール川河口まで、広く北アジア沿岸地域にたどれるとの見通しを述べた。

論でMaringerは福井県の魚形が刻まれた石について言及する。ところがそれは、田北とは逆にキリシタンが残したことへの否定的な見解だった。福井にカソリックの司祭や伝道士が来たのは新しい時代のことで、キリシタンが「イクトゥス」を知っていた可能性はきわめて低く、子安観音風にアレンジされた聖母子像らしき刻画や天保四年の年号および念仏文字があるものの、それらは後代に描き加えられているとの主張だった⁽⁵⁾。

武藤も秋田県内のキリシタン迫害史の研究歴があり（武藤1948）、「イクトゥス」についての知識は持ち得たと思われる。実際、県内にはその存命中に見えられながら武藤が扱わ

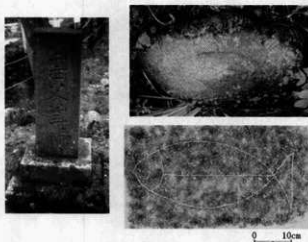


図1 横手市増田戸波「イクトゥス」と「霊父尊神」碑

なかった魚形刻石が県南横手市増田戸波にある。地区の旧家、織田兵太郎家の邸内にある石で江戸時代から続いた旧宅の大黒柱の土台石に使われていた。昭和29年の旧宅解体時に発見されたという⁽⁶⁾。72×42×22cmの花崗岩質の河原石で、長さ42cm、幅18cmの魚形が描かれている(図1右)。幅15cmの尾鰭は胴体輪郭の弧線が交叉して刻まれるが、この尾鰭以外に鰭表現はない。鰭の弧線が頭部近くにあり、さらにそのなかにも眼を表現する短い弧線が加えられる。ほかに、武藤があげた県内他例にない特徴として、鰭の弧線中央と尾鰭の交差点を結ぶ正中線が刻まれている。しかし、最も大きな違いはその図柄を描いた刻線そのものにあり、矢島町や秋ノ宮稲住、あるいは阿仁根子例に比較し、幅3mm前後と極端に太くかつ2mmほどと相当に深い線で刻まれていることである。それだけに魚形のはっきりと描かれるが、一方で刻線は長さ1~2cmの短い単位でわずかにズレながら連続する。他例にない特徴である。しっかりとした線で全体を描きながら、細部に目を凝らすとあたかも震えながら描いたようなズレが連続するのである。一定の長さを鋭い刃を押し当て一気引いて刻んだのではない。石表面に当てた尖った金属工具を槌で加撃しながら1~2cmずつ彫り込んだ結果であり、武藤がいうところの“タガネ彫り”の実例を見ることができる。

これが「イクトゥス」であることの可能性を強く示唆するのが、同じ邸内、魚形刻石から数mに立つ高さ70cmほどの石碑である(図1左)。その表面には「靈父尊神」、側面には「文化十一年」の年号が刻まれている。横手市増田には奥羽山脈の東、岩手県一関に居を置いたキリシタン大名後藤寿庵の伝説が残る、キリスト教の隠し文字を描いた掛け軸が伝えられ、この石碑との関係も指摘される(増田町1997)。田北は前杉遺跡および福井・三室遺跡の魚形を「イクトゥス」と見なし、Maringerは福井の事例をもってその可能性が薄いことを論じた。そして武藤は前述の田北への反論のなかで、キリスト教に関係する魚形文様についての知識を沢田美喜子『大空の饗宴』を引用し述べながら、前杉遺跡をはじめとする秋田県内のサケ石の描法が、“タガネ彫り”ではない石器による刻みであると観察し、反論した。田北が論をなした年に発見された戸波の魚形刻石について、武藤は扱っていない。しかし、武藤の県内キリシタン研究歴を考えれば、それを知りながらも敢えて扱わず前杉遺跡を含む県内他例を最晩年の論で再び石器時代遺物として扱った、と考えて良いだろう。石器で刻んだとの確信に揺らぎはなかったことになる。武藤の考古学は石器製作法や使用法研究をその柱に据えていた(小林2010)。その成果を認めていたからこそ、Maringerは田北と同じ大学でかつ神父でありながらも「イクトゥス」説に立たず、広く北アジアを見渡した視点で論をなすことができた。

3 武藤鉄城によるサケ石発掘

前杉遺跡のサケ石は昭和28年6月に念願の発掘調査がなされた。喜田の主張以来、石器時代に帰属することは武藤の主張でもあったが、その時代を明らかにすることは研究を進める上で不可欠のことだった。帰属時期を確定すべくなされた調査には、当時島海村の診療所に赴任してい

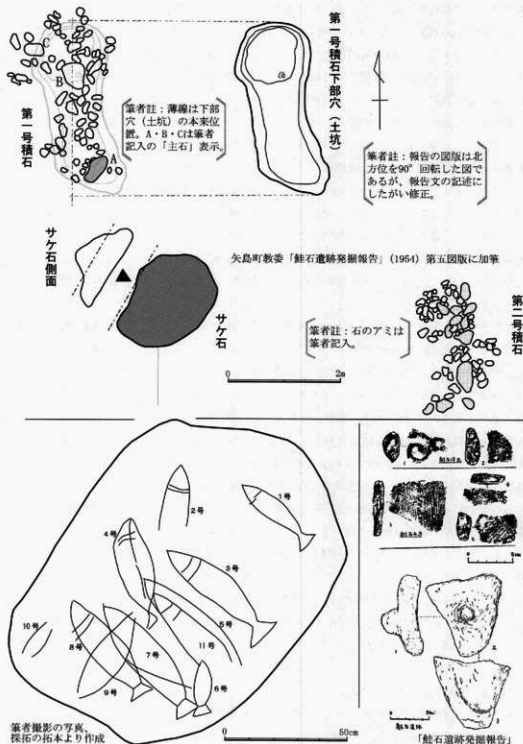


図2 前杉遺跡 サケ石および出土土器・石器

た興野義一なども参加している。調査の報告は昭和29年に矢島町教育委員会から刊行された。

武藤はこの調査を行う以前、昭和26・27年に文化財保護委員会と秋田県が合同で調査した大湯環状列石の発掘に参加する。そして、その前後には秋田県内で類似した配石ないし積石遺構のある遺跡、西木村袖野遺跡、神代村黒倉遺跡、早口町矢石館遺跡、千屋村雲嶺野遺跡などを調査する。これらは石器時代すなわち縄紋時代の配石ないし積石の遺跡であり、調査の主たる成果は墓地の確認だった。前杉遺跡の発掘でも、このような配石・積石遺構の調査手順にしたがい、まず当時地表に現れていたサケ石周辺へのボーリング探査を行い、その後トレンチをいれ周辺に2基の積石を認めたことから「露天掘り」、すなわち、全体を露出させたことが述べられている。

この2基の積石について武藤は以下のように記す。

「第一号積石 長軸南北に延び、約三メートル、短径一メートルほど。拳大からその二倍、三倍ほどの河原石の、丸石、平石などから構成されているが、約五十センチほどの間隔を保って、主石と思われる大石が四箇置かれてあった。

発掘途中、南部分から石小刀三個（筆者註：報告図版指示、以下同）と、中央から少量の木炭が出ただけで、遺物は少なかったが、解体してロームまで発掘するに及んで、その北部主石下に、次のスケールの穴が出現した。

径一メートルの大体圓形、そして東部から二十センチ、三十七センチ、三十九センチと次第に西に深い穴。しかし内部から、何物も検出し得なかった。（報告図版指示）

第二号積石 長軸二メートル五十センチ、幅八十センチ、主石二箇、しかし構成の石は一号のものより大きく、組石の感じをうける。この積石の西縁からは、厚手土器小破片、（報告第六図①）が一箇出た。また北側から石小刀二箇、（報告図版指示）出土した。この第二号積石は、積石塚のモデルとして遣し置くため、解体しなかったので下方に穴の有無は検し得なかった。」

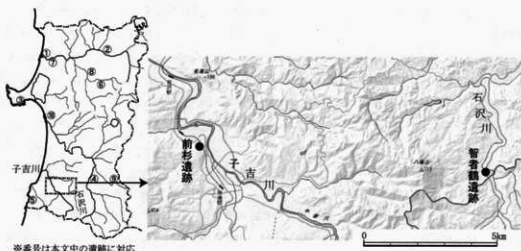
図2上段にはこの記述に対応した報告書の第五図版を引用した。武藤の記述とこの図にしたがえば、サケ石の北西側にある第一号積石には大きさが二分される石が集められ、そのうち、A～Cと指示した石が比較的大きく報告に述べる「主石」の3つと思われる。しかし、「五十センチほどの間隔を保って」「主石」が4つ配置するのだから、おそらく本来はAとBとの間にも相応の石がなければならないがその図示はない。調査にあたり抜き取られたか。なお、図では記述を伴わずにAの「主石」にアミが被せられているが、あるいはこれは立石の表記らしい。また、下部の穴（土坑）を描いた平面図は南北に長い輪郭だが、「径一メートルの大体圓形」と記すことから北側に三重の線で描かれた部分が穴（土坑）の本体であろう。底面は「東部から二十センチ、三十七センチ、三十九センチと次第に西に深く」、石を積み以前に開口した状態で相応の規模だったことがうかがわれる。しかし、逆にその南に続く部分は深さの記述がないことから推して、おそらくAおよびBの間の石を発掘で除いた後の凹みと解することができる。さらに、焼土の記述はないが積石の「中央から少量の木炭が出た」ことは注意を要する記述である。人の活動があれば焚き火で生じた木炭は、攪乱され碎片となり他の遺物とともに遺構を覆う土に均等に混じ

るのが通例である。しかし、遺構の「中央」と限定し「木炭が出た」ことを述べているのは、「少量」といえども攪乱を受けない、もしくはその程度の少ないまとまりを視認できたことを意味する。その成因に関しては他所で焼けた何かが、焚き火で生じた木炭もろとも積石に運ばれ置かれたと見るのが妥当であろう。積石にはほかの何かが木炭とともに集められていたことになる。第一号積石はB、Cの「主石」および周囲の「拳大からその二倍、三倍ほどの河原石」が集められた部分が穴（土坑）の上を覆った積石であり、その延長が穴（土坑）の南側の外に続いていたことになる。そして穴（土坑）の南側の縁のBのおそらくそのさらに南側に、木炭を伴って集められた何かがあったことが推察される。

第二号積石もまた図から判断して、拳大程度の石とやや大きめの石（図中アミ掛け）とに二分される。大きめの石は南側で4個、北側で8個ほどが見てとれるが、そのうちのどれが「主石二箇」であるのかは示されていない。しかし、「組石の感じをうける」と記されるように、北側の大きめの石は互いが近接し一部は重なって描かれている。第一号とは異なる印象を与え、おそらくは大湯環状列石を構成するのと同じ「組石」ととられたのかも知れない。

二号積石について重要なのは「西縁から」出土した「厚手式土器小破片」である。図2右下に前杉遺跡出土の土器5点の図を引用したが、「鮭石伴出」と小さく見出しされた1は報告中、積石の記述に続きサケ石周辺出土と指示された土器である。二号積石に伴って出土したのは2であろうか。拓影からは文様などはいかがえない。サケ石周辺、北西35cmで出土したとされる1は、武藤が「厚手渦巻浮文土器破片」と記したように特徴的に右巻の渦巻きが現れている。断面が拓影で示され、土器のどの部分かは判然としなが、おそらくは大木8b式土器の突起のように見える。このほか、サケ石上方20mの台地上面で採集された3～5についても武藤は「中期厚手式」と記している。4は文様が見えないが、3には縦位の熊糸紋が、5にはおそらくLR横位回転の縄紋が見てとれる。1の大木8b式よりはやや新しく、大木9式ないし10式の深鉢体部破片と見られる。武藤のおよその見立てと齟齬しないし、二号積石に伴った可能性のある2についても大木8b式以後の中期後半の土器と見て良い。石器以外の遺物が示されていない第一号積石についても、同時期を考えるのが穏当だろう。前杉遺跡のサケ石および積石は中期後半、大木8b式以降の時期に作られ、土坑を伴った第一号積石では焚き火で焼けた何かが木炭とともにあり、また、第二号積石では石を組み上げた痕跡が認められた。なお、図2右下下段には側面、裏面、上面の3面展開の「有脚石皿破片」とされる図を引用した。これについて武藤は「県内の他の組石、或は積石遺跡から出る例と同じく、この遺跡で発見された2つの積石に関連して考えられる」とし、5～6個出土したという石皿と対の「丸石」についても同様に見ている。石皿や「丸石」「叩潰石」すなわち磨石・凹石類が伴ったことも大きな特徴といえる。

土器の伴出によりサケ石の帰属時期が確定しただけなく、予想外に見えられた特徴的な積石遺構は、武藤にとって大湯環状列石以下、県内類似遺跡に与えた墓地としての評価を強く印象づけるものだった。積石の状況を他の類似遺跡と比較しそれより古い型式と見なし、「若しそれら



※番号は本文中の遺跡に対応

図3 秋田県内サケ科遺存体確認遺跡と前杉遺跡・智者鶴遺跡位置

が墓地とするならば、丁寧に穴を掘って埋めないで、地表を僅か掻いて屍体を置き、その上に僅かに土を盛り、石を積んだ葬法が考えられる」と、報告の最後に加えている。

Ⅲ サケ科遺存体

1 智者鶴遺跡の配石とサケ科遺存体

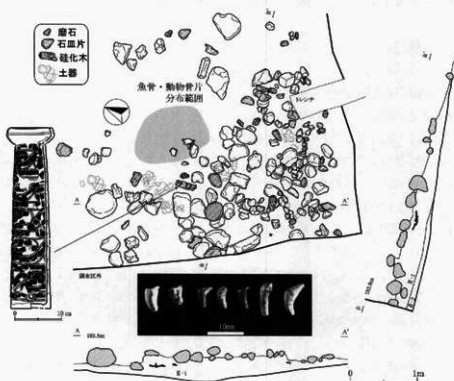
サケ石のある県南部子吉川水系は毎年サケの捕獲が多い地域である。中でも前杉遺跡下流から東に分岐する石沢川は多く、平成22年度でも7,316尾があげられている。県内では2万尾以上の川袋川に次ぎ二番目の多さである。石沢川は子吉川本流から東に分かれたあと、県南内陸の高峰、八塩山を迂回する。この八塩山東麓の源流近くで、平成20・21年に縄文時代後晩期の智者鶴遺跡の発掘調査が行われた（加藤 2010）。

智者鶴遺跡は前杉遺跡から八塩山を挟みほぼ東に、約11kmの位置にある（図3）。石沢川が作った標高183～184mの左岸段丘上、川との比高は3～4mである。遺跡付近で石沢川は南東側に屈折し源流へと上るが、このあたりで南西側にも狭い沢が伸びる。遺跡はちょうど石沢川とこの沢とが二又に分かれる地点、東西および南から丘陵が迫るきわめて狭い場所にある。東西の丘陵の間は500m足らずしかない。調査では、後期前葉から晩期の掘立柱建物跡2棟や土坑50基、そして配石遺構6基が見つかった。なかには数個～数十個の川原石が積み上げられた土坑があり、それら土坑と配石から推して、遺跡全体は縄文時代後期から晩期の墓域と考えられた。そして注目されたのは、調査区のほぼ中央で見つかった配石遺構SQ52である（図4）。

SQ52は東西3m、南北2mの範囲に、拳大から人頭大の礫を集めた配石遺構である。配石は後期前葉～中葉の遺物包含層であるⅡ-1層を掘り下げる過程で見つかった。南側に拳大の礫が集

中し、北側には比較的大きな石がおおよそ2mの範囲で置かれている。Ⅱ-1層の配石確認面から下では後期前葉の縁帯紋土器に類した深鉢や鉢、壺形土器が出土し、配石面と同じレベルでは図4左下に示した体部が異様に長い後期中葉の単孔土器が、下端の孔を上向きに石の間に納められて出土した。遺構の時期はこの土器が示す後期中葉以前、前葉までは上らない時期と考えられた。特徴的だったのは、人頭大の礫に囲まれたほぼ中央1.1×0.8mの範囲に木炭粒とともに動物骨片の散布範囲が認められたこと、南側の拳大の礫群中に石皿片、磨石・凹石類などが混在したことである。

動物骨片は焼けており小型ほ乳類や鳥類、魚類としてはアユやコイ科、そしてサケ科（歯骨／図4写真）が含まれていた（中村 2010）⁷⁷。これらの骨の集中範囲では木炭の散布はあるものの、赤く発色した焼土は確認されなかった。智者鶴遺跡以外に秋田県内でサケ科の骨が確認されているのは、図3に示した①杉沢台遺跡（前期）（上野 1981）、②池内遺跡（前期）（西本 1999）、③大畑台遺跡（中期前葉）（金子 1979）、④神谷地遺跡（中期後葉）（山崎 2015）、⑤ラフキ遺跡（後期中葉）（黒澤 2003）、⑥漆下遺跡（後期）（黒澤 2011）、⑦柏子所Ⅱ遺跡（後期末～晩期）（黒澤 2005）、⑧白坂遺跡（晩期）（山崎京 1994）、⑨虫内Ⅰ遺跡（晩期）（山崎京 1998）、⑩戸平川遺跡（晩期）（山崎京



秋田県文化財調査報告書第454集「智者鶴遺跡」(2010)
第13・42・67図に加筆

図4 智者鶴遺跡 SQ52配石遺構および出土サケ科歯

2000)の10遺跡であるが、このうち神谷地遺跡の堅穴建物炉跡、漆下遺跡捨て場および焼土遺構、柏子所Ⅱ遺跡捨て場、白坂遺跡捨て場、および虫内Ⅰ遺跡土坑、戸平川遺跡出土の6例はいずれも焼けた状態で見つかっている。池内遺跡の湧水ある捨て場出土歯2点、椎骨4点は焼けておらず、杉沢台遺跡のフラスコ状土坑内貝層出土椎骨1点、大畑台遺跡のフラスコ状土坑出土の椎骨18点、ヲフキ遺跡の椎骨1点については不明である。智者鶴遺跡のサケ科の骨は焼骨で見つかった漆下、柏子所Ⅱ、白坂、虫内Ⅰ遺跡と時期が近く、他の獣骨とともに焼けた骨が配石のなかへ集められ残されたとして良いだろう。

また、礫群中に確認された磨石・凹石類は17点、石皿片は20点であった。智者鶴遺跡では磨石・凹石類が630点あまりと多く、墓域を構成する土坑など遺構出土も全体の15%ほどある。石皿片も同様で247点のうち22%が遺構出土例であった。報告ではこの磨石・凹石類の多い事実を、遺跡の性格に関わる特徴ととらえている。そして礫の配置に組み上げた状況が見られないこと、獣骨片も伴う事実から、「モニュメント」的な遺構ではなく、むしろ葬送儀礼に密接に関係する「祭壇様の施設」ではないか、とする。

時期にやや違いがあるにせよ、子吉川水系の近接した2遺跡、智者鶴遺跡と前杉遺跡で配石(積石)遺構があり、特徴的に石皿や磨石(丸石・叩潰石)が使われ、かつ焼けた獣骨片や木炭の集中があることは注目すべきことである。そして、前者では確実にサケ科の骨が検出されていた。

2 県内他遺跡でのサケ科遺存体

県内でサケ科の骨の検出がある遺跡は前節にあげたとおりだが、見つかった状況の子細がわかる例を確認する。

県北内陸中央、森吉山北麓にある後期前葉～後葉の漆下遺跡では、遺跡北側を流れる小又川に沿った下流側の広い調査区で、東西2箇所の捨て場の堆積土中にサケ科の骨の集中が見られた(表1)。遺存体が含まれる土壌は10mm、5mmメッシュで篩分けし、サケ科の骨はそのそれぞれと、それ以下の3段階に分けたなかから抽出された。検出できたのは両捨て場とも5区画である。西側捨て場(ST01)では143点の椎骨と8点の歯が、東側捨て場(ST101)では119点の椎骨と5点の歯が検出された。完存椎骨には横径が6～7mmの大型骨があり大半は破片でシロザケと推定されたが、一部25mm以下の椎骨も含まれヤマメなど小型の種類もあると見られた。西側捨て場(ST01)ではMQ39区画の2つの層でサケ科椎骨30点以上の層が2層あり、東側捨て場(ST101)ではLT35区画の2つの層で同じく20点以上の椎骨を確認した層が2層ある。歯も少ないながら出土していることから、頭部を取り去った乾燥ないし燻製の魚体が遺跡に持ち込まれたのではなく、現地周辺で捕獲・解体処理され、頭部を含むその骨格が焚き火に投げられた可能性が高い⁽⁸⁾。2箇所の捨て場は斜面に薄層が重なる盛土であり、サケ科の骨もそれぞれ複数の層序にまたがっている。椎骨、歯ともに焼け、対応する土層註記を照合すると、二次堆積を含む焼土あるいは木炭の集中に伴い検出されたことがわかる。報告に記載されるカエル類、ヘビ、ネズ

ミ、テン、イタチ、ウサギ、タヌキ、キツネなど他の小動物、およびキジなど鳥類の骨と焼き火に晒されたことを示すのだろう。

西側捨て場（ST01）では上記の区画のなかに、2箇所の焼土遺構が確認されサケ科の骨は別にカウントされている。1つは沢頭から18.5mほど北西にあるSN1100である。焼土面は2×1.7mほどの大きさの不整形で、後期中葉の土器や石器が伴い準大の礫が散在していた。他の小動物骨・鳥骨片とともに焼けたサケ科椎骨34点、歯2点が確認されている。もう1つはこれよりやや上、沢頭から9.6mほどにあるSN1103である。斜面の傾斜に沿って長い2.08×1.24mの楕円形

表1 漆下遺跡捨て場内サケ科遺存体確認数

区画	遺構	品名	数量	備考	区画	遺構	品名	数量	備考
西側捨て場 (ST01)	M000	207 焼土層	3		東側捨て場 (ST01)	L735	207 沢頭下で焼骨多量	1	
	M030	427 大量の炭化物・焼土層・SN1995有り	4				444		1
		209 炭の侵入目立つ。焼土・焼骨含む	2				207 炭化物多量		1
	M039	207 焼土層	1				110 炭物と焼骨多量	21	
		457 焼土層	5				112	8	
		207 焼土層	1				130 焼土・炭化物、焼土層、焼骨多量	61	1
		37 37ボタと焼土層の互層・焼土層面上	45	5		L736	207 炭物・焼土・焼土層を含む	1	
		37-40 焼土層含む	16				207 焼土層多量	1	
		207	2				207 焼土層多量	1	
	M039	457	9				207 炭化物多量	4	
西側捨て場 (ST01)		457 焼土山南土、焼骨多量混入	37	4	L737		207 焼土層を含む、焼骨多量	1	
		207 部分的に焼土層と一体	5				209	8	1
		87	6				107 二穴を隔て含む	7	
		209	7				202 炭物多量	3	1
M040	57		1	1	L738		2 焼土層を含む焼土層	1	
					M07	SK05			1

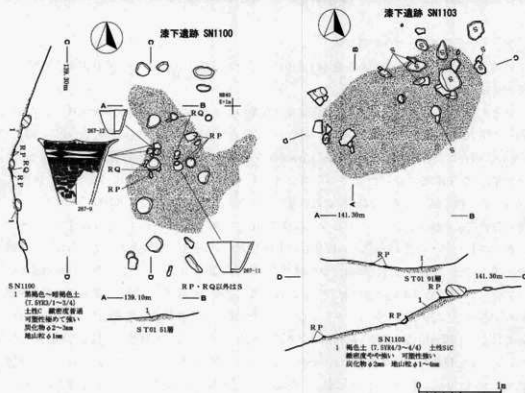


図5 漆下遺跡SN1100、SN1103サケ科遺存体出土遺構

の焼土面として確認された。斜面の上方側を中心に拳大の礫が不規則にまとなり、下方側には土器片が数点確認された。焼けたサケ科椎骨9点、歯1点が同じく小動物骨・鳥骨片とともに確認されている。

報告ではこの2つの焼土遺構のサケ科小動物の骨が原形をとどめないほど被熱していたことから、骨の状態で焚き火に投じた、生活残滓を送る儀礼痕跡の可能性を考えている。焼土面の規模は、例えば一般的に想定される竈穴建物跡内の地床炉と比較しても2～3倍程の広さをもち、焚き火としても特別だったことがうかがわれる。かつ、礫がまばら、ないしある程度のまとまりで伴ったことにも注意すべきだろう。表1に示した捨て場の区画は東西とも全体が薄層からなる盛土であるが、SN1100、SN1103はともに西側の薄層中に作られた遺構である。そして前述のように、この2つ以外の盛土中の焼土層からも焼骨があることを考えれば、SN1100・1103の周囲にさらに別に焚き火が広がることが考えられ、報告が述べるような儀礼があったとして、それは各所に広がっていた可能性がある。

漆下遺跡は県北部米代川水系奥部の遺跡であるが、県南内陸奥部でもサケ科の骨の特異な出土状況が記録された遺跡がある。雄物川支流、横手川沿いにある虫内I遺跡は後期後葉から晩期前葉の墓域で、土坑墓171基、土器棺墓153基などが見つかった。そして、この遺跡の南側の一隅に、サケ科を含む小動物骨入りの土器を納めた土坑SK61が確認された。

SK61はほかの2つの土坑SK62およびSK142とともに、重なりあって見つかった。2つの土坑よりも新しい。約70cm×1mほどの楕円形を呈し、深さは40cm程度である。底面から6cmほど上に黒褐色の埋土に挟まれて横倒しの大洞BC式粗製壺があり、そのなか1/3ほどを満たした土にサケ科椎骨9点、歯4点が、イノシシの歯や他の小型魚椎骨とともに見つかった。歯および椎骨は焼けて灰白色化していた。報告では人為的に焼かれたサケ科を含む小動物の骨が壺に収めら

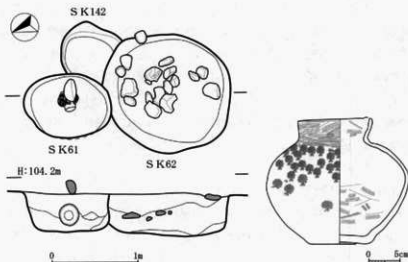


図6 虫内I遺跡サケ科遺存体を納めた土器と出土土坑SK61

れ、土坑内に埋納されたと考えられている。虫内Ⅰ遺跡ではこのほかにも焼土遺構、配石土坑、配石遺構、建物跡柱穴、土器埋設遺構で焼骨が比較的多く出土しているが、遺跡が晩期の墓域であることもあり、これら焼骨についての評価は人間の葬送との関わりで考えられた。分析した山崎京美は、こうした骨類がすべて灰白色を呈し亀裂・収縮・変形が認められることから、解体後まもなく800℃以上の高温で1時間20分以上焼かれたと推定している。

雄物川水系の本流側沖積地の遺跡でも最近にサケ科の焼骨が確認されている。雄物川右岸微高地にある神谷地遺跡は中期後半の環状集落の遺跡であるが、大木8b式から9式期までの12棟の竪穴建物跡の炉および焼土遺構1基、埋設土器1基からサケ科の骨の確認がある。特に3号（歯4、椎骨片163）、7号（椎骨片132）、15号（歯3、椎骨片1426）、47号（椎骨片317）の建物跡炉からの出土が多い。これらの建物跡は全体の位置では環状集落の南側隅にまとまり、47号を除いては集落の始まりに近い大木8b式期に属する。同定した山崎健は神谷地遺跡での動物遺存体が住居と考えられる建物の炉跡からの出土であることから、一般的な調理中の混入や残滓の焼却処理を考えながら、特にサケ科が集中した建物跡については冬季の季節的な居住、すなわち9月から1月までにかけての漁期の居住の可能性を指摘する。

漆下遺跡、虫内Ⅰ遺跡、神谷地遺跡の内陸に対して、沿岸域でもまとまった量のサケ科の骨を確認した例がある。晩期中葉の墓域がある戸平川遺跡では、墓域に隣接した沢部分から多くの土器および石器とともに、藍胎漆器や漆塗櫛、樹皮容器などが出土した。この沢部分の土壌から篩分けにより総量2.7kgの焼骨が回収され、山崎京美によりいくつかの地点資料から、シロザケないしサケ科の椎骨・歯が同定されている。ことにLJ47-a区V層から採取された土壌中には椎骨490点、歯17点と多くの骨が認められた。他の遺跡と若干異なるのは獣骨の大半が、内部が黒化するほどに高温で焼かれながらも、これらサケの骨のなかに半焼けないし焼けていない椎骨43点があったことである。山崎はこれも含め水洗選別中に見つかった細かな鱗などの骨にそうした火の受け方の弱い、あるいは全く受けていない例が目立つと述べる。解体処理中に特定部位があらかじめ取り除かれ、異なる扱いがなされる例かも知れない。アイヌのサケの解体では一定の様式があり最初に頭部先端を歯がついたままで切り捨て、旭川ではこの部分にキケ（イナウの削りかけ）を付け神壇に保存するという（大飼 1954, p87）。また、後にも引用する新潟県北部岩船郡山北町のサケの初漁儀礼でもイチビレと呼ぶ胸鰭とオッパと呼ぶ尾鰭は、調理に際しエビス神に供えられる（菅 2000, p78）。

3 旧胎内川流域でのサケ科遺存体

前節まで秋田県内のサケ科骨の出土例のうち、遺構伴出を含む注目すべき例を確認した。県外ではどうか。山形県では日本海沿岸の遊佐町小山崎遺跡でサケ科の歯や椎骨が確認されている（金子 2000）。おそらく内陸にもあると思われるが、実態はよくわからない。

日本海側の調査では、近年、新潟県北部沿岸域の確認が目立って多い。村上市長割遺跡（後期

前業) (滝沢ほか 2011), 道端遺跡 (後期末～晩期前業) (渡邊ほか 2003・2005), 胎内市江添遺跡 (後期前業～中業) (寺崎ほか 2005), 道下遺跡 (晩期前業) (沢田・折井ほか 2007), 野地遺跡 (後期中業～晩期中業) (渡邊ほか 2009), 新発田市青田遺跡 (晩期終末) (荒川ほか 2004) がある。これら遺跡はいずれも沿岸の沖積低地上にある。後期にはトチの水さらし場遺構が丘陵谷筋から低地に作られるなど、気候冷涼化、植生環境の変化に応じた居住および生業上の大きな変化が想定されるが、後期以降の遺跡立地が中期までと大きく異なることを示す典型である。また、この地域には北から三面川、荒川、胎内川、落堀川と直接日本海に注ぐ川が並ぶが、胎内川は本来直接海に開かず、砂丘後背を北上して荒川に合流する支流であった。支流としての旧河道右岸沖積地には、上述の野地遺跡、道下遺跡、江添遺跡、道端遺跡が並ぶ。新潟県北部でのサケ捕獲量は4万尾を超える三面川が1位であるが、荒川もまた1万尾を超える量がある。旧荒川支流胎内川沿いのサケ科の骨を確認した遺跡の立地は、現在の捕獲量とも関わっている。

現在の胎内川沿い、右岸に最も近い野地遺跡では、高速道路橋脚位置に設定された調査区から多くの獣骨が出土し、2500袋に及ぶ焼骨資料が得られている。分析した樋泉岳二が掲げた同定表からは、5つ設けられた調査区のうちP1区で16の、P2区で15、P3区で12の資料からサケ科の骨が確認されている (樋泉 2009)。そしてそのなかに、いくつか遺構に伴う例がある。図7②～⑤はサケ科焼骨が伴った遺構である。

SX1315はP2区の堅穴状遺構埋土を除去した後に発見された、径82×42cmほどの範囲に土器片、礫、焼土が集中する遺構である (図7②)。焼土を覆って礫や土器片が集められるが、礫には組んだ痕跡は認められない。焼土からはサメ類やタイ科の歯に混じって、サケ科歯2点と椎骨片2点が確認されている。別地点で焼けた魚骨類が焼土とともに投棄された結果と推定されている。SX32はP1区で確認された焼土遺構である (図7③)。径135×84cmの長軸一端が緩れたイチジク形のプランがあり、膨らんだ側の中央に径35cmほどの焼土を中心とし2～5cmほどの礫が密集する。そしてさらにその上を粗製深鉢の破片が覆う。焼土からはコイ科や種不明の魚骨・獣骨に混じり、サケ科歯1点と椎骨片7点が見つかった。礫は被熱せず、また焼土もブロックが集まった状況でSX1315同様、他所焼成の骨が焼土とともに集められたようである。特徴的なのは礫のなかに2点の石皿があり、ほかに磨石1点が伴っていたことである。前杉遺跡の積石遺構、智者鶴遺跡の配石遺構SQ52との関わりが考慮される。SK1507はP2区で見つかった土坑であるが、その埋土の凹みのなか110×100cmのほぼ円形の範囲に礫が集められていた (図7④)。埋土の凹みに集められた礫群を覆う土には、タイ科やアユ、板鰻類に混じってサケ科歯8点、椎骨片7点が含まれていた。注目されるのは、土坑底面に立て掛けられた長さ55cm、幅40cmの板材と、その脇に確認された人骨らしき焼骨塊である。報告では人の歯が出土した土坑墓のなかに板敷きの確認例があることから、これについても屈葬遺体を埋めた土坑墓あるいは葬送に関連する遺構かと推定している。SF2606はP3区から見つかった焼土遺構である (図7⑤)。径51×50cmの被熱変色範囲のなかに径34×30cmほどの焼土が認められる。変色範囲を伴うことから現地

性焼土と考えられ、焼土からはシカ臼歯、コイ科、ニシン科、タイ科の歯・椎骨に混じりサケ科歯9点と椎骨片3点が確認されている。

野地遺跡の北1kmほどにある道下遺跡からは、10棟の堅穴建物跡、232基の土坑、6基の埋設土器といくつかの焼土遺構、炭化物集中箇所が見つかった。大洞B2～BC式期の墓地を備えた集落跡である。これらのうち焼土遺構1基と炭化物集中1箇所、そして土器埋設遺構1基からサケ科の骨が確認されている。堅穴建物跡SI52を切って作られた土器埋設遺構SH12では、高さ36cmほどの粗製深鉢の内部から、大型～中型獣類骨の破片、コイ・フナ類椎骨、スズメ目の骨などに混じり、サケ科の歯2点、椎骨片12点が出土した（図7①）。サケ科の骨が焼けているかどうかの記述はないが、他の骨類を含めすべて破片であること、また、歯の写真には亀裂が見られることからおそらく焼骨だろう。ほかに焼けた獣骨・鳥骨片、コイ・フナ類の鰓蓋などとともにサケ科の椎骨片1点を確認した炭化物集中SC10は、磨石1点を伴っている。

道下遺跡の北1kmほどの江添遺跡は、土坑141基や捨て場として使われた自然流路などが見つかった遺跡である。後期の捨て場とされたSD09ではイノシシ、ニホンジカの獣類骨やウグイなどの淡水魚骨に混じりサケ科の椎骨片92点、歯8点、顎骨片4点が、また土坑SK994では焼土層の上からウグイ骨とともにサケ科椎骨片4点が確認されている。

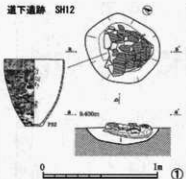
江添遺跡の北2.5kmほどの道端遺跡では、後期末から晩期の土坑や遺物集中ブロックが見つかる。土坑SK01では埋土中位に形成された焼土面直上からコイ科やアユの椎骨に混じり、焼けたサケ科椎骨片16点が、また、そこから離れた遺物集中ブロック2ではカエル骨などとともに同じく焼けたサケ科椎骨2点が確認されている。

ほかの新潟県北部での遺跡として、後期前葉の村上市長割遺跡では焼けた獣骨・人骨などとともに、サケ科椎骨片278点、歯33点、顎骨2点が袋状土坑、石囲炉、地床炉、柱穴から確認され（滝沢ほか 前掲）、晩期終末の新発田市青田遺跡でもやはり焼けたサケ科椎骨片24点が、炭化物集中範囲やクリ・トチ・クルミなど堅果類廃棄範囲から確認されている（荒川ほか 前掲）。さらに南部においても中期前葉の糸魚川市六反田南遺跡で、サケ科椎骨2855点、歯113点、顎骨3点が他の獣骨類とともに焼けた状態で、土坑内、炭化物集中範囲、柱穴内から出土している（山崎2012）。

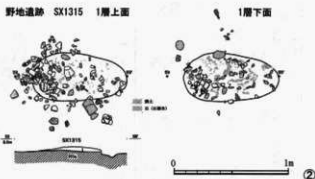
旧胎内川流域を含め、これら遺跡は海岸砂丘後背の沖積地上、日本海に注ぐ河川近くの遺跡である。捕獲が実際になされた可能性があるが、サケ科の骨は多くの遺跡で焼けた大量のシカ、イノシシ等の他の獣骨や魚骨とともに出土している。他の獣骨が混じる点では智者鶴遺跡や虫内I遺跡と同様である。魚類の捕獲についてもサケ科のみを対象に専断的な訳ではないらしい。

山崎健の指摘（山崎2013）にもあるように、それらが焼けて確認される事実は注意しなければならない。この点前節で述べた後期以降の秋田県内遺跡例も、戸平川遺跡で認められた一部例外を除けばやはり焼けた状態である。焼けて出土するサケ科の骨については、一般的に焼き干す保

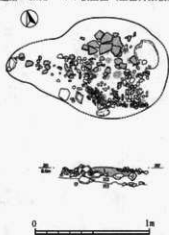
道下遺跡 SH12



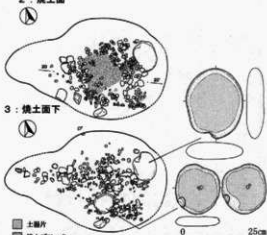
野地遺跡 SX1315 1層上面



野地遺跡 SX32 1: 検出面 (土器片集積)

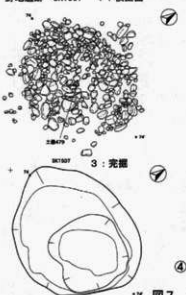


2: 焼土面

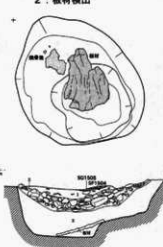


3: 焼土面下

野地遺跡 SK1507 1: 検出面



2: 板材検出



野地遺跡 SF2606

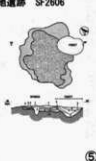


図7 新潟県道下遺跡、野地遺跡 サケ科遺存体出土遺構

表2 サケ科遺存体確認遺跡

	道路	行政區	水系	時期ほか		道路	行政區	水系	時期ほか
北海道	大間町道	網走市	網走川	前期(山岳集成で早瀬)	宮城	栗島具原西澤地区	鳴瀬町	松島川	後期中盤
北海道	静内2号線	小惑市	湧別川・寛平川	前期後半(同上)。早期および前期	宮城	七ヶ浜町	秋保川	後期前半	前期後半
北海道	南幌4号線	小惑市	美々川・美沢川	前期	宮城	神谷川線	五里町	阿武隈川	後期中葉～後期半
北海道	美々貝塚	千歳市	美々川	早期中～早期前半	宮城	樽見町	阿武隈川	後期半	後期半
北海道	札幌山手線	石狩市	石狩川	中期	秋田	杉形古跡跡	鷹代町	米代川	前期後半(フラスコ状土坑内貝類)
北海道	篠の1号線	知内町	知内川	中期末～後期初期	秋田	遠内遺跡	大館市	米代川	前期中～後葉(途て橋)
北海道	マシム田舎遺跡	亀岡村	プユウヒ川	中期～前期初期	秋田	大台古跡跡	界南町	日本川	前期後半(フラスコ状土坑内)
北海道	伊達古墳	八雲町	迫川	中期末	秋田	磐梯古跡跡	奥田本郷市	石川・右沢川	後期・晩葉(配石溝内)
北海道	五戸河原	雄勝町	河川	後期～後期	秋田	ツブキ遺跡	川尻川	後期中葉	
北海道	曙10キロ貝塚	室蘭市	登呂川	中期後半	秋田	湯下遺跡	北秋田市	阿仁川・小沢川	前期(途て橋、焼土)
北海道	茂野貝塚	紋別町	赤川	後期初期	秋田	谷子坪2号遺跡	能代市	米代川	後期末～晩葉(焼土)
北海道	入江貝塚	紋別町	蝦夷川	前期末～後期	秋田	白根遺跡	能代市	阿仁川	後期(途て橋)
青森	寺下遺跡	東上町	遠馬川	後期末～後期半	秋田	神谷遺跡	横手市	雄物川	中期後半(住居内貯・盛土遺跡・焼灰土層)
青森	赤崎史前跡	八戸市	御前川・松樹川	早期後半	秋田	森ノ内遺跡	山内町	雄物川・横手川	後期(途て橋、焼土)
青森	柳子飯敷遺跡	八戸市	高瀬川	早期後半	秋田	芦川遺跡	秋田県	雄物川・旭川	後期中葉(沢・低地部)
青森	八幡遺跡	八戸市	高瀬川	前期前半	山形	小崎古跡跡	遊佐町	伏拝川・牛渡川	早期～後期
青森	赤7号遺跡	八戸市	五戸川	早期末	山形	押出遺跡	高森町	吉野川	前期
青森	新戸遺跡	八戸市	後藤川	後期中末・晩葉	福島	上ノ内遺跡	鮎川町	鮎川川	中期後半～末
青森	古舘史前跡	八戸市	雄川・中津川	前期中・早期前半～後葉	福島	蔵持古跡跡	喜望峯町	阿賀川	早期後半
青森	ニッ森遺跡	七戸町	七戸川・野川・赤川	後期中葉～中期後半	茨城	稲田(神明宮)貝塚	稲城市	阿賀川	後期前中葉
青森	東通ノ土遺跡	東北町	土門川	前期中	千葉	谷津倉貝塚	千葉市	小中台川	前期
青森	諏文(2)遺跡	三沢市	神前	中期末葉	千葉	金山貝塚	鎌子市	利根川	後期～晩葉
青森	山中(2)遺跡	三沢市	小川原川	早期末葉	千葉	京の南道貝塚	市原市	香取川	後期前中葉
青森	鳥矢貝塚	むつ市	青平川	中期末葉	東京	前田池遺跡	あきる野市	幸手川	前期
青森	沢ノ尾遺跡	黒川町	沼根川	前期末葉	新潟	香取遺跡	新潟市	蒲川	後期
青森	三内丸山遺跡	青森市	豊川・神川	後期中葉	新潟	前田池遺跡	妙内市	蒲川	前期
青森	牛ノ平遺跡	六ヶ所町	津軽川	前期末葉～後期前葉	新潟	湯下遺跡	妙内市	蒲川	後期前中葉
青森	砂立遺跡	弘前市	岩木川	早期前半	新潟	江戸遺跡	妙内市	蒲川	後期前中葉
長野	二ツ貝塚	久慈川	久慈川	後期後半～後期中葉	新潟	湯下遺跡	村上市	三浦川・門前川	後期前中葉
長野	熊井貝塚	野沢村	安良川・玉川	後期末	新潟	元祖史前跡・上段	村上市	三浦川	後期前半～後期後半
山梨	峠山貝塚	宮古市	源川	前期末～中期初葉	新潟	湯下遺跡	村上市	荒川	後期末～後期前中葉
山梨	長谷川貝塚	大船橋市	濁川	中期中～後葉(住居内貯・盛土遺跡)	新潟	香取遺跡	新潟市	蒲川	後期末葉
山梨	大淵貝塚	大船橋市	濁川	後期中葉	新潟	六反田遺跡	新潟市	蒲川	中期後半～後期
山梨	門前貝塚	昭和町	沼根川	後期前半	新潟	前田池遺跡	新潟市	荒川	後期中葉・後期末
山梨	観音貝塚	昭和町	荒川	後期中葉～後期	新潟	湯下遺跡	新潟市	荒川	前期後半～中期初葉
山梨	比呂貝塚	足利町	北上川	後期初期～後期	新潟	湯下遺跡	新潟市	荒川	前期
山梨	高倉貝塚	足利町	北上川	後期前半～中期	新潟	湯下遺跡	新潟市	荒川	前期
山梨	清川台遺跡	韮崎市	北上川・千瀬川	中期後半(住居式土坑内)	新潟	湯下遺跡	新潟市	荒川	前期
山梨	上芝田遺跡	韮崎市	北上川・水内川	中期中葉～末・後期前葉(住居式土坑内)	新潟	湯下遺跡	新潟市	荒川	前期
富山	内堀2号貝塚	加賀市	大川	前期後半	新潟	湯下遺跡	新潟市	荒川	前期
富山	田嶋貝塚	加賀市	大川	後期中葉～後期前半	新潟	湯下遺跡	新潟市	荒川	前期
富山	中沢貝貝塚	加賀市	北上川	後期前葉	新潟	湯下遺跡	新潟市	荒川	前期
富山	尾山峰貝塚	友方町	若狭川	後期初期	新潟	湯下遺跡	新潟市	荒川	前期
富山	平田貝貝塚	友方町	若狭川	中期初葉	新潟	湯下遺跡	新潟市	荒川	前期

泰山崎（京）ほか 1998、山田 2005、福田 2012、および渡邊裕之氏、山崎健氏、植月学氏の教示により作成

存過程の火の使用か、食する際に火にあぶり調理した結果が想定される(山田 2005)。事実、中部地方千曲川沿いの内陸部遺跡としてサケ科の椎骨551点、歯24点を確認した千曲市屋代遺跡群では、椎骨の9割、歯の7割が中期後葉の焼土を伴った4本柱の掘立柱建物跡から確認され、サケ・マスの燻蒸保存処理施設と考えられている(水沢 2012)。このような処理施設は今後も個別には確認できよう。しかし、焼骨および歯をもって、それがすべからず燻蒸保存や調理の結果と見なす訳にもいかない。小稿であげた諸例では他の獣骨・魚骨類も同様に焼けて伴っている。そして前述した山崎京美の観察のように、獣骨の焼成が高温・長時間になされた場合を考えると、調理場面の想定よりはむしろ、残滓となった骨を焚き火に晒す場合を想定しなければならない。すなわち、サケ科を含む獣骨・魚骨それ自体に対し火を用いる儀礼的行為の可能性である。その痕跡は焚き火跡の場合もあれば、儀礼的行為の後に他所に集められ木炭集中範囲として認められることもある。

もう一点注意するのは、そうした結果に残った骨や歯が配石や集石から出土し、石皿・磨石類が伴う場合があることである。すでに見たように前杉遺跡、智者鶴遺跡でも積石や配石に木炭の集中、そしてサケ科を含む獣骨・魚骨類の集中がある。そしてこの2つでは磨石や石皿が伴っている。野地遺跡でのSX32にも石皿・磨石が伴う。焼けた獣骨が砕かれていれば、このような石皿・磨石類が用いられたかもしれないが、いずれにしてもこうした磨石類が配石・集石の儀礼的行為の場の構成にあることは十分に注意すべきことと考える。

さらに加えて、サケ科の骨を含めこうした焼骨片を伴う遺構が、墓域に組み込まれる場合があることも象徴的な事実である。虫内Ⅰ遺跡では171基の土坑墓、153基の埋設土器からなる墓域にSK61があり、道下遺跡では40基以上の土坑墓、6基の埋設土器からなる墓域外縁にSH12がある。道下遺跡の報告では「葬送施設とは別の、「再生」に関する祭祀施設という機能・用途」の可能性を想定するが、空間的に全く別な訳ではない。あえていうなら「葬送」と「再生」との関わりの中で、SH12が存在したと見るべきであろう。

Ⅳ 骨を焼くこととサケの儀礼

1 木炭集中と焼骨出土をめぐる解釈

縄紋時代の遺跡、それも特殊な遺跡での焚き火の痕跡に着目し、さらには出土する動物の焼骨に注目して、祭祀と結びつけて考えたのは大場磐雄だった。大場は前期末の長野県上原遺跡の第二次調査の報告で木炭の多く混じった小穴に注目し、それを祭りの儀式の場で動物または器物を「聖火」の焚き火に投じて浄化し、木炭とともに埋め神霊に供した跡と見なした。そして上原遺跡全体を山霊たるアルプス連峰を仰ぎ見る縄紋時代の共同祭祀場である、とした(大場 1957)。供犠となる動物を焼いて浄化する儀礼のイメージは、上原遺跡に次いで調査された後期の井刈遺跡の発掘調査でさらに具体的になった。扁平な河原石に囲まれた小規模な配石遺構の近

くに、木炭および焼骨が混じった複数の焼土ブロックを確認したのである。焼骨には小動物と特定された骨が多くあり、大場はこれをもって上原遺跡と同様に井刈遺跡でも供犠のため小動物の骨が焼かれ、祭壇たる配石遺構の下に埋納されたと考えた（大場ほか 1963）。

大場は木炭の集中そして焼骨出土が「神」に対する供犠の痕跡を示すという考えに導かれ、祭祀場の解釈に達した。この場合の「神」は上原遺跡においてアルプス連峰の「山霊」であり、井刈遺跡においては遺跡近くの会田川の「川霊」である。そして配石を、石それ自体に対する信仰にも関わり、それら遺跡周囲の自然霊に対する具体的な祭壇と考えた。しかし、一方で配石が墓標を含んで墓に関わる性格を備えることにも留意し、焼骨も動物供犠に限定せず人の葬送での火葬を含むとも考えた。「一方は祭祀場で、一方が墓地と、一見、相違するが、その根本的な観念においては相通ずるものがあると考えたい」こう述べて配石と焼骨の2つで、祭祀と墓葬の不離の関係を考えようとした。

同様に配石や焼骨の出土に留意しながらも、大場に対しやや異なった見解を提出したのは高山純である。高山は骨類を伴った関東・中部・北陸を中心とする35遺跡の敷石・配石・集石遺構を集めた。そして、それらが中期頃からの焼骨を伴う事例であること、「遺構の内部及びその周囲に一般に焼いて、後に故意に砕いてばらまいたような」（高山 1976b, p49）状況がみられること、木炭や灰を伴う場合が多いこと、鹿角も含まれることなどを指摘した。特に骨自体や食料とはならない鹿角までも焼けていることに注意し、中期末頃からの焼人骨の出土例と関連づけられる事実と考えた。そして、結論的にアイヌの「物送り」に近い観念にもとづく行為を想定した（高山 1976a・1976b）。

高山は日本列島の民俗や北方狩猟民の狩猟儀礼に骨を焼く行為がないことから、大場の全面的な支持には立たずアイヌの「物送り」を引用した。しかし、アイヌの「物送り」は縄紋時代全体の廃棄思想そのものに関連するとし、火で焼く行為との間に相関を認めず、むしろ大場が説く火に対する信仰から「聖火での浄化」の可能性を支持したのは新津健だった（新津 1985）。新津は選ばれた個体、選ばれた部位の骨を変形するまで火に晒し、「細かく砕き、そして撒くといった点からすると、新しい生命となって再生することを願うまつりとも考えられる」（新津 1985, p145）と、再生祈願説を展開した。そして、大陸新石器時代の大汶口文化から竜山文化早期までの遺跡、遼寧省郭家村遺跡のブタを含む獣骨に焼けた出土例の多いことを列島の例証としてあげた。

大場に始まる木炭集中や焼獣骨の出土に対する注意は、縄紋社会における信仰上の供犠と浄化、あるいは他界観に関わる「物送り」の論として展開した。前章に扱ったサケ科の骨を含む焼骨も概ねこれらの解釈論の範囲内に考えるべきことであろう。前述したサケ科の骨を含む焼獣骨が象徴的に墓域に組み込まれる事実も、既然大場以来注意されていることである。しかし、一旦、考古学的な文脈を離れサケに対する民俗誌ないし民族誌的事象を参照すれば、解釈の範囲はさらに狭まり考古学的事象の示す意味の輪郭もより鮮明となる。次節以下に追う。

2 北米北西海岸でのサケをめぐる神話・儀礼と骨を焼くこと

高山は遺跡から出土する焼骨について、骨を焼く行為が火の信仰と結びつくことを認めつつも、狩猟漁撈儀礼と結びつく民俗・民族誌的事例の欠如を最も疑問に思ったようである。確かに北方狩猟民の狩猟儀礼ではト骨に類するような特殊例を除き、そのような事例は認められない。そして逆に解体後の残った骨を手厚く扱う例がある。例えばロシア国境に近い中国黒竜江省から内モンゴルにかけて住むオロチョン族のクマ猟では、解体し肉を食した後に頭蓋や時には骨格一揃いを柳の枝か俵に納めて木にかけ、「グルオイレン」と呼ばれる風葬儀式を催す⁽⁹⁾（王・関1999）。人間の風葬同様最も手厚い儀礼であるが、その場合に骨が焼かれることはない。クマを殺し食したことへの赦免に加えクマの靈魂を天上へ送る折祷句が唱えられるのだから、オロチョン族自身の風葬と同じく、骨を空中に保存することで霊送りを促す儀礼である。その意味には再生とさらなる豊饒への期待がある。

食料となるべき生き物の部分が保存され地上とは異なる世界へ送られる儀礼は、成層化社会である北米北西海岸インディアンのサケの扱いでも端的に示される⁽¹⁰⁾。

著名な人類学者フランツ・ボアズに学び、長くシアトルのワシントン大学で教鞭をとったErna Guntherは19世紀の北西海岸インディアンの記録をもとに、彼らの主食であるサケにまつわる儀礼、ことに初漁を中心とした儀礼とその広がりについてまとめた（Gunther 1926・1928）。彼女が記録から引用したなかには捕食した後のサケの残滓を海川へ返す儀礼がいくつかある。たとえば、Kwakiutl族では初漁儀礼に招かれた賓客が食した後の骨や皮を、漁人の妻が全て拾い集めマットに包んで海に投げ入れる儀礼を行う（Gunther 1926, p607）。あるいはKwakiutl族より南のSalish族はフレーザー川上流のLillooetにおいて、初漁の際の祝宴（feast）の後サケの骨はその再生を願って川に投げ入れられる（同, p608）⁽¹¹⁾。そして、これら行為は北西海岸インディアンが信じる禁忌を伴う神話に拘束された儀礼であるらしい。サケの国（そこではサケは人の姿をしている）に連れて行かれ、空腹時には子供（すなわちサケ）を棍棒で撲殺し食べ物を許された少年が、同時にその骨全てを保存し川に流すよう注意される。注意どおりに骨を流すと子供らは直ちにサケとして蘇り、少年はそのサケの群れとともに川を上り父の村（すなわち人間社会）に戻って人々にサケの扱い方を教えた（同, p615）。神話は概ねこのような筋で作られている。Guntherはこの神話が13の部族⁽¹²⁾のうち5つに認められるとし、必ずしも儀礼を忠実に叙述し検討できるとはいいがたいが、紛れもなく十分説明しうる話であるとした。そして同様のモチーフをもつ神話として野生ヤギと若い狩人の話も引用する（Gunther 1928, p162）。彼女によればこうした骨を川に流す儀礼はサケに限定されず、Lillooetやフレーザー川支流トンプソン川のShuswapではシカや川で捕らえたビーバーの骨も流されるという。そして他ではチョウザメの骨を流したり、またガチョウ、アヒル、白鳥の羽根が鳥となって戻るよう水に投げ入れられることもあるという（Gunther 1928, p158）。

生きるために自然界の生命を奪う猟漁民の営みが、禁忌を伴う儀礼で合理正当化される。背景

表 3 北西海岸 部族ごとの岩画・岩絵数

Tribe	pattern	Petroglyph	Pictograph	Comb	Unknown
Tlingit		76	9	-	2
Haida		20	2	-	-
Tsimshian		9	3	1	-
Kwakwaka'wakw		46	183	-	2
Bella Coola		8	8	-	-
Nootka		17	8	-	-
Coast Salish		77	97	2	-
Chinook		18	5	1	-

※ Lundy M.D. (1974) Rock Art リスト (p. 9 ~ p. 69) を集計。ただし、"Additional Tlingit and Haida Site" 12 遺跡は除外。pattern 凡例は下図に対応。

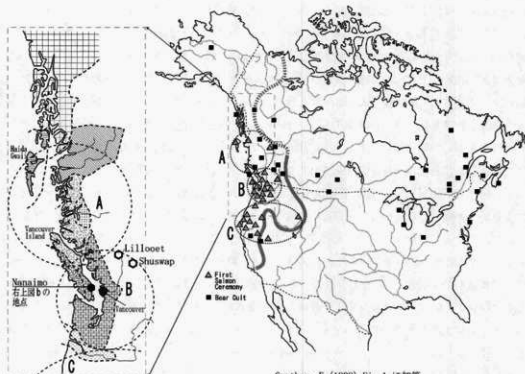


a



1 foot

Lundy M.D. (1974) Fig. 11 より



Lundy M.D. (1974) Fig. 1 に加筆

Gunther, E (1928) Fig. 1 に加筆

※ 太線（実線・点線）の左側が Salmon の遡上範囲。なお、原図にある First Fruits Ceremony の点は省略。

図 8 北米北西海岸の First Salmon Ceremony と Bear Cult、北西海岸の Rock Art

の神話で生き物は擬人化され手厚く扱われて此岸と彼岸を往還する。神話を現実社会につなぐ儀礼の鍵となるのが、奪われる生き物の生命の象徴というべきその体の一部であり、それは決して粗末にされることなく可能な限り完全に保たれ送られる。高山が意識したのは、こうした民族誌が示す捕食された生き物の部分“保存”とは対照的な、縄紋時代の配石空間で行われた骨を焼く“破壊”の様態だったのである。そこからは神話の拘束的な機能すなわち禁忌を読み取ることが難しい、と考えたのであろう。

ところが、北西海岸インディアンのサケをめぐる儀礼には“保存”だけでなく、“破壊”を指示する神話もあるらしい。サケの国に行った少年の神話が、GuntherのあげたSalishよりも北に位置するTsimshianではやや変形したモチーフで伝わっている。王子として登場するサケの国(村)に行った少年は

「空腹時にはいつでも外で遊んでいる村の子供を棍棒で叩き殺すよう教えられた。王子がいわれたとおりにすると、その子供は直ちに鮭になった。王子は食事の後に残った骨をすべて火の中に入れるよう命じられた。そのように鮭の骨を火の中に入れば、鮭は鮭の国で再生するであろう。鮭の干物を一年以上保存してはいけない。なぜなら、食べられて、骨を燃やされないうちは、鮭たちは決して解放されないからである」(D・キュー P・E・ゴッダート/菊池・益子訳 1990, p115-116)。

これに続けて神話は、人間の子供の病んだ眼が燃やし忘れたサケの眼を火に投じることで回復する話を続ける。GuntherはSalishとTsimshianの間に位置するKwakiutlの初漁儀礼として、サケの眼を火箸で挟んで黒焼きにすることをあげるが(Gunther 1926, p607)、この神話を具体的に表す儀礼である。

食した後の残滓を保存し川に流すのではなく、全て火にかけ燃やすことで生き物は再生を果たすことができる。部分が保存されたままでは解放されることがなく、したがって蘇りもない。神話はそのための徹底した“破壊”を指示し、そして一部は象徴的な儀礼として実際になされる。表れる行為は対極にあっても、“保存”し川に流すことと火にかけ“破壊”し尽くすことの意味は、ここでは生き物の再生を願う行為として同じである。高山の疑問となった骨を焼く“破壊”が狩猟・漁撈儀礼と結びつく民族誌的事例は、少なくとも北米北西海岸インディアンのサケに対する神話のバリエーションと、それに関わる儀礼として存在する。

このような民族誌的な事実と意味を確認すれば、Ⅲに述べた後期以降の智者鶴遺跡や漆下遺跡、虫内Ⅰ遺跡など秋田県内遺跡、旧胎内川流域の野地遺跡、道下遺跡、道端遺跡など新潟県内遺跡、それら遺跡でのサケ科の骨や歯が、例えば山崎京美の観察どおり高温・長時間の焼成で収縮し、ひび割れていることに一定の理由があることとして見えてくる。そしてⅡにあげた前杉遺跡積石の木炭集中さえも、サケ石と組み合わせることで焼かれたサケ骨が集められた痕跡だったのではないかと、そう疑われてくる。

3 北米での動物儀礼と北西海岸のPetroglyph

サケの初漁儀礼について考えたGuntherは、北半球のクマ儀礼（bear cult）について論じたAlfred Irving Hallowellに依りながら（Hallowell 1926）、サケの初漁儀礼とクマ儀礼との関係に論及し、東シベリアから北米大西洋岸にまで広がるクマ儀礼のなか、北米大陸の北方ではサケの初漁儀礼の分布が図8右のように一部重なることを指摘した（Gunther 1928, p158）⁽¹³⁾。そして彼女が分布以上に注意を向けたのは、サケとクマ、この2つの生き物に対する儀式パターンの類似だった。

「クマに関して最も広くある禁忌はその骨が犬などから遠ざけられることであるが、それはサケの心臓が火に投げられ骨を川に投じるのと同じ理由によるものである」（同前）

捕えられたクマは祈祷師によりなだめ慰撫され定まった仕方では屠殺解体され、部族の特別な成員によって食され、そして残滓さえも特別に処理される。これはシダー樹皮のマット上で解体され、穢れない成員のみが食することを許され、残滓となった骨さえも同じマットでくるまれて流されるサケと同等の手厚い扱いである。

サケとクマとは、擬人化され尊敬をもって取り扱われる生き物の代表的存在である。Guntherはこうした生き物に関する丁重な態度は潜在的にどのような動物や、さらには野生植物に対してすらあり、捕獲および収穫が卓越した季節性を示す場合に儀礼として発達すると分析する（Gunther 1928, p158）。明らかに北西海岸では春に大挙し遡河するサケがその典型である。

ところで、このサケの初漁儀礼が分布する北西海岸からアラスカ南西部にかけては、岩画petroglyphや岩絵pictographが知られる地帯である。それらには、さらに細かく分類される動物意匠、幾何学意匠が実に多様なモチーフとして表現される。それらを集め分布や機能を論じたカナダ、ブリティッシュ・コロンビア州博物館の学芸員、Doris Marion Lundyは、その論文「北西海岸における岩絵芸術」の中でサケについても触れている。論文に掲げられたサケのモチーフ2つを図8右上に示したが、aはアラスカ南西部、bはバンクーバー島NanaimoにあるJack's Pointの岩画とされる。Lundyはサケが北西海岸インディアンにとって重要な食料であることから、このような岩画・岩絵はかれらの漁撈活動に関連して表現され、種類を特定できないものの明らかに海の生き物である表現の大半にも、サケの傾向がうかがわれるとした。そればかりでなく、漁場に近く、潮の干満で水面に浮き沈む岩に描かれた人物モチーフすら、神話に登場する「サケの国」の人と見なされる表現ではないか、と考えた。そして逆にシカのような獲物として一般的な動物が必ずしも岩画や岩絵に描かれることがないのは、サケほどに猟が重要と見なされていないからだとした。そして、少なくとも沿岸部族の1つの間で実際に知られるように、その週上が少ないか遅かったりしたときのみ、そうした岩画・岩絵が描かれたのだらうと推測した（Lundy 1974）。

自然からの獲得経済で維持される社会では、特定の季節に一定収量が確保できない危機を避けるため、神話に由来した社会を拘束する禁忌がありそれを犯さぬよう、様々な場面の流儀や作法が複雑に組み合せて儀礼が執行される。前節に述べた神話とそれに従った儀礼はその実際の表れ

である。しかし、一旦そのような事態が生じれば、危機からの回復をはかる積極的な手だてが講じられる。Lundyはそうした場面での機能がそれら岩画・岩絵に課せられていると考えた。サケは食料として最も重要な獲物だからである。

積極的な手だてすなわちまじないと、そして犯してはならない掟すなわち禁忌、そのそれぞれと対になって危機からの回復、回避を図る儀礼は、J. G. Frazerによっても「共感呪術」の1つと説明される。そして北西インディアンのサケ漁をめぐるのは、バンクーバー島のNootka族の呪術師がサケの不漁に見舞われた際その模型を作り、サケの上ってくる方角に向けて水に入れる儀礼を例示する。その呪術によってたちまちのうちにサケは上るという（フレイザー／内田・吉岡訳 1994, p66）。Lundyの説明した岩画・岩絵もFrazerが例示したNootka族のサケの模型も、表現や仕方は異なっても、危機からの回復をはかる同じ機能をもったものだっただろう。

表3はLundyがまとめた部族ごとの岩画・岩絵を、その種別で数えた結果である。アラスカ南西部に近いTlingitでは岩画が多く、Kwakiutlでは岩画も多いがその4倍ほどの岩絵がある。また沿岸Salishも岩画・岩絵ともに多いが、これらに対してTsimshian, Bella Coola, Nootka, Chinookでは岩画・岩絵ともに少ない。ごくおおまかに部族ごとの呪術・儀礼のあり方がそれらの多寡に反映したと見ることができそうである⁽¹⁴⁾。そして、それをGuntherの描いた初漁儀礼の分布と重ねて見たときにも、中心的な分布の1つは岩画・岩絵の多いKwakiutlおよび沿岸Salishに一致する。サケの初漁儀礼、特徴的な岩画・岩絵はやはり神話で繋がれている⁽¹⁵⁾。

V 日本海側のサケをめぐる伝承と考古学的事象

1 「鮭の大助譚」と「異形石棒」「青竜刀形石器」

前章でサケの焼骨と関わる縄紋遺跡の焼骨全体の解釈を確認し、北米北西海岸インディアンの神話と儀礼が示すサケの扱いを見た。さらに加えてサケの神話にまつわる具体的な遺構、岩画petroglyphや岩絵pictographと儀礼分布相互の関わりも確認した。ここでは再び列島の日本海側東北・北陸地方に立ち戻り、民俗誌的事象と考古学的事象とが示す関係性を考えたい。

図9下には日本海側の現在のサケ捕獲量を河川ごとに示した。人工孵化が行われ随所に遡上を阻むダムが建設されているもとは、自然状態をそのまま見ることはできないのはいうまでもない。しかし、サケ遡上の分布概略を知ることではできるだけだろう。新潟市に河口がある信濃川（千曲川）から北と、上越市に河口がある桑取川より南とに捕獲数の高い河川群が分かれることが見てとれる。中段には日本海側のサケ遡上地帯に特徴的な「鮭の大助譚」をまとめた土田勇人の報告（土田 1983）から、神野善治が作った分布図を引用した（神野 1984）。サケの終漁の頃、「鮭の大助いまのぼる」の声を聞いた者に災いが降りかかるとの伝承は、山形県を中心に信濃川以北、秋田県南部までに広がり青森・岩手にもわずかながら分布する。この広がりの北側の一角を、前杉遺跡を含む秋田県内のサケ石が占める。そしてⅢで扱った、縄紋時代後期以降の焼けたサケ科の骨

が特徴的な出土状況を示す遺跡は、中心となる山形県がやや不明なものほぼこの伝承が広がる地域に分布し、おそらくそれを包摂してあると思われる。

ところが一方で、サケの捕獲数について見れば、桑取川以南でも信濃川以北と同等ほどにある。飛騨山地北麓あるいは北アルプス連峰西麓に源流をもち富山湾に注ぎ込む河川群、あるいはそこから糸魚川周辺まで連なる小河川群がそれである。しかし、それにもかかわらず、これら河川の流域には「鮭の大助譚」は分布しない。焼けたサケ科の骨は糸魚川市六反田南遺跡でも確認されているのだから、伝承の不在境界を越え南に広がっていることになるが、これはサケ科に限定されない獣類一般の焼骨儀礼との関わりも考慮すべきことだろう。むしろ、注意したいのは、この「鮭の大助譚」の不在地域、石川、富山、岐阜でのある特徴的な遺物の存在である。

それは「異形石棒」と呼ばれる後期以降のこの地域独特の石棒である。図9上段左には橋本正がまとめた集成図からいくつかを引用した。橋本は石川以下の3県を中心に後期末から晩期に登場する「御物石器」の原形を探し求めるなか、この石棒を集成した。そしてその形態的な特徴について図9上段4の石棒を指して「異形石棒の原形は動物であるらしく、確実に「シャケ」の体形を取る例が認められる」（橋本 1976, p11）とし、本来、魚形の意匠をもつ彫刻であることを述べた。さらにはその側縁の一方が広く平坦に作られ、あるいは舟底状の溝や窪みのあることをもって、男根を模した中期形石棒からは独立し、むしろ水平に置かれる点で石冠と共通する性格が考えられるとした。石冠との共通性は橋本の集成後の資料であるが、魚形腹面側に広い平坦面をもつ石川県真路遺跡出土例（図8上段6）（高田ほか 2006）がよく示す。

橋本があげた図9上段4の石棒は、縄紋時代における魚形の立体表現の典型例として早くから扱われるが（名取 1960）、図が示すように魚形頭部の反対側、尾部側には四叉の彫刻を施した影らみが設けられている。4よりも粗略の作りの2、3にもこうした尾部側の影らみがある。設案博己はこの魚形の「異形石棒」とは別に岐阜県出土と伝えられる猪頭の石棒をあげ、その「末端はややふくらんですっぽ抜けないようにしているところを見ると、（中略）重い頭部で何かに打撃を加えるための石槌であろう」と推察し、北西海岸インディアンがサケ漁に用いる棍棒と比較した意味を考察する（設案 2008, pp24-25）。猪頭の石棒の末端の影らみは橋本が掲げた「異形石棒」と共通する。両者とも手に持ち、打撃を加えるための道具が象徴化された石製儀器である。

「異形石棒」の特徴でもう一点注意されるのは、図9上段1～3に顕著な胴体の反りである。頭部から伸びた胴体の尾部に近い側で湾曲し、2、3では尾部末端の影らみに連続する。こうした反りもち、かつ打撃を加えるための道具として想起されるのは、本州の魚叩きの民俗資料として菅豊があげた「ナツチ」、「タタキボウ」である（菅 1995）。形態のわかる25例のなかに新潟県南魚沼郡や旧北魚沼郡、旧岩船郡、山形県最上郡など、8例の反りのある木棒があり、うち5例は「バット型」と呼ばれる「異形石棒」に通じる末端の影らみがある。すなわち、「異形石棒」は本来、木製の魚叩棒を石製に替えて象徴的に表現した儀器と考えられる。設案のあげた猪頭石棒との関わりで考えれば、富山・石川・岐阜では、これら儀器に漁漁を問わず撲殺儀器として共

通の意味が与えられたことがわかる。

さらにこの「異形石棒」と対応し、津軽海峡を挟む地域から秋田・岩手両県北部にかけては、縄紋時代中期末から後期初めにかけて「青竜刀形石器」が分布する。やはりサケ漁にからむ撲殺の儀器和推定され（藤本 1977）、西脇対名夫はその形状の典型例がサケなどの魚の依り代とすべく魚形を象っているとして、「石魚」と呼ぶべきことを主張した（西脇 1991）。図9上段にはその分布を併せ示し、渡島半島の2例（野村 1985）を引用した。「青竜刀形石器」と伝承の分布は、「異形石棒」の場合ほどに画然と分かれたる訳ではない。しかし、やはりその中心域は異なり、伝承の分布とは周縁で僅かな重複が認められるだけである⁽¹⁶⁾。

こうした撲殺儀器としてのサケないし魚形をかたどった立体表現が「鮭の大助譚」とは排他的に分布し、平面表現であるサケ石は逆に「鮭の大助譚」に包摂されて存在する。そして、サケ科の骨が焼けて出土する遺跡は、「鮭の大助譚」とは親和的な分布を示しつつ、他の焼獣骨との対応ではおそらくその外延へ広がることになる。民俗誌的事象と考古学的事象との重なりないし対応の構造は、前章第2節、第3節で見た北米大陸のサケに関する神話・儀礼と岩画petroglyph・岩絵pictographの重なりともパラレルな関係だといえる。図8のBear cultの分布は北米大陸北側に広く、北西海岸でFirst Salmon Ceremonyと一部で重なる。そして岩画・岩絵はFirst Salmon Ceremonyないしその背景にある神話と関係づけられるが、部族ごと、あるいは岩画・岩絵の種別ごとのその分布には偏りがある。さらにその神話・儀礼との機能的な関係を考慮すれば、同じようなはたらきがまったく別種の物象として残される場合もある。

2 サケをめぐる考古・民俗（族）誌的事象の象徴性

さて、サケ石から説き起こしてきた議論であるが、縄紋時代後晩期のサケ科の骨の出土遺構について残した問題2つについて言及しておきたい。

1つは焼けたサケ骨出土の遺跡が墓地と絡む問題である。Ⅲに引いた智者鶴遺跡、漆下遺跡、虫内Ⅰ遺跡、戸平川遺跡、そして道下遺跡は後期および晩期の墓域から焼けたサケ科の骨が出土している。また野地遺跡でも状況的には墓坑と見られる土坑上の礫群から、焼けたサケ科の骨が出土している。焼けた獣骨一般について、大場磐雄や高山純が人間の葬送との関連で考えたことは前述のとおりだが、焼けたサケ科の骨が墓ないし墓域から出土する傾向は重要である。

Ⅲでとりあげた新潟県北部の遺跡に近い、旧岩船郡山北町大川郷でのサケ漁および初漁儀礼を調査した菅登は、この地のサケ漁では死の忌はむしろ縁起の良いものであることを記している。

「葬式に使った花輪、竹細工、天蓋、ろうそく、棺を縛る赤いさらしの紐、棺担ぎの棒、葬式饅頭などを漁場にもってい」く。そして築に立てる一段高い杭、「エビスグイ」にはこの棺担ぎの棒が用いられることもあり、「エビスグイ」にはエビスサマの神札を紅白の水引きでしっかりと結わえつけ、これに餅と神酒を供える。さらに、サケの廻上を願って別のエビスサマの神札を川に流す」（菅 2000, pp72-73）

昔はこの神札の付けられたエビスグイをサケが上る目印である一方で、同時にサケにとって撲殺され命を失うまさにその場所であることを強調する。人の死の象徴である棺担ぎ棒がサケにとっても落命の象徴エビスグイとなる、異界に生きる人とサケの生命の触れ合い、相互の靈魂循環の関係が説明される。北米北西海岸Lillooetのサケ漁でも、サケの遡上を願って少年が祈りを捧げるため、漁場に立てられる築杭には装飾が施される(Gunther 1928, p147)。“えり”状遺構の発見された、盛岡市萩内遺跡の「トーテムポール状木製品」(工藤・中川ほか 1982)を彷彿とさせる民俗(族)誌である。

後晩期の遺跡でこうした民俗(族)誌と全く同じことがなされたかはわからない。しかし、昔が説明する民俗誌は、焼けたサケ科の骨が人の墓地に間違って出土することに対し十分に暗示的である。墓地において解体後の骨が焼かれる儀礼があったことは、想定範囲において良い。

そして、そうした儀礼が行われたとして、その遺跡に磨石・凹石類あるいは石皿などが残されていることも注意される。一般に植物質食料、ことに堅果類のすり潰しが用途に考えられる石器であるが、果たしてそののみが使われ方だったのだろうか。再々度、北西海岸インディアンの民族誌を参照する。

「Lillooetでは特にベニザケをサケ類のチーフと見なして儀礼が執り行われる。多くは他と同様の方法で執行されるが、儀礼に先立って村の長老達それぞれの名が付けられた小枝を並べ、その上に右鰭を下にしてサケを横たえろという手の込んだ導入がある。氏族がサケを歓迎する意味である。そして“mush”(粥状)に調理しての祝宴の後、舞踏儀礼が行われ、祝宴の後にはサケを再生させるため、その骨は川のなかに投げ込まれる」(Gunther 1926, p608)

Guntherはこうして述べてサケの初漁儀礼での祝宴の調理に、煮て粥状にすることがあったことを述べる。そして、ほかでも同じLillooetの初漁の調理を次のように記す。

「ストーン・ボイリング用の新しい石が洗浄のため同じく新しい籠に入れられて水漬けされる。サケは丸ごと茹でられ棒を使って新しいシダー樹皮のマットに置かれ鰭と背骨が取り除かれる。さらに再び“mush”になるまで茹で上げられ、そして新しい匙を用いて2つの新しい皿に取り分けられる。人々は魚を食べるために集まるが、未婚の成人女性、生理中の女性、孤児ならびに未亡人そして“男やもめ”は初漁のサケを食べることが許されない。しかし、他の者すべてはサケを食さねばならず、男性は男性の、女性は女性の皿から食べるのである。」(Gunther 1926, p608)

Lillooetではその身を焼くのではなく焚き火で焼いた石を投げ入れ、沸騰させた湯で煮る調理がされる。そして調理の程度は、茹で上げる“boil”の度合いを越えて“mush”にまでされ、匙を使って取り分けられる。サケ科の焼骨が出土する遺跡に特徴的に残された磨石・凹石類あるいは石皿などは、こうした粥状の調理に用いるストーン・ボイリング用の石、あるいは骨ごとにもその身をすり潰す道具の可能性はないか。

「秋田県の大曲市の雄物川流域では(中略)・・・鮭・鱒の食法は事例で見た通りであるが、特に注目される食法はカシラナマス・叩きである。鮭・鱒を問わず、頭部のヒズ(氷頭=軟骨)を珍

重し氷頭脛にすることは広く知られているのであるが、氷頭以外の頭部や、時には骨までも叩きにし、脛にするのである」（野本 2005, p207）

大曲のサケ漁は小稿冒頭にもあげた。民俗学者の野本寛一はそこでのサケの食法をこう述べる。そして、その調理法が列島各地に伝わる兎や山鳥ないし魚類を骨ごと潰して食する「食べ尽くし」に共通し、その際の道具として先史時代遺物と見紛う石皿の実例をあげる。“mush”に加工する調理は列島でもあったと見るべきで、サケのすり潰しの道具として磨石・凹石類あるいは石皿が使われた可能性は十分に考慮される。

VI 収束

小稿ではⅡに前杉遺跡のサケ石を扱った。そこからⅢでサケ科の焼骨が出土する遺跡の特徴的な例を見た。Ⅳでは縄紋時代の焼骨一般についての見解を確認した上で、北米北西海岸でのサケの初漁儀礼・神話を通して骨を焼くことの意味を考え、その一方の表現である岩画・岩絵の意味と分布を儀礼の分布と照合して考えた。そして、前章では列島東北・北陸地方日本海側でのサケの遡上範囲を確認し、それと「鮭の大助譚」、焼けたサケ科の骨出土の遺跡、サケ石の分布を確認し、「異形石棒」「青竜刀形石器」の分布と照らしてその意味を考えた。加えて遺跡と墓地との関わり、また遺跡に特徴的な磨石・凹石類そして石皿についての民俗（族）誌を参照した。

考古学的な事象からより普遍的な意味を引き出し広汎な歴史のなかに位置づけようとする場合、他の考古学的事象との比較のみならず、往々、時間や空間を越えた民俗や民族誌との比較が必要となる。小稿で扱った北西海岸インディアンの文化は「サケ・マス論」の提唱以来、縄紋文化の東ないし北日本での優位性の説明としてたびたび参照される民族誌である。このような民族誌の参照は比較考古学の方法に含まれ、史学としての考古学にとり有意である（菊池・高橋・熊林 2004, pp73-74）。そして、列島の考古学にとっては、各地に残る民俗誌を参照しつつその全体が示す文化伝統の構造と比較することもまた有意である。小稿はまさにそれら比較の有意性に立脚する。扱う考古学的事象は民族や民俗誌と隔絶しているのではない。

冒頭Ⅰに記したサケ漁の光景や、まじないを見ることは最早ない。筆者の経験は伝承記録に残る中世修験の頃から、筆者の記憶に残るまでの間のことだったか。菅豊は岩船郡山北町の「ハツナギリ」と呼ばれるサケの初漁儀礼と修験との関わりを、次のように述べる。

「個別的な漁撈儀礼としてのハツナギリが、この修験道儀礼的ハツナギリからの発展、派生であるとは考えにくい。むしろ逆に修験道が、民間の個別的な漁撈儀礼を吸収する、あるいはその儀礼の構造を下敷きにして、修験の修法を彩りつつ新しいムラのハツナギリ儀礼を形成させたと考えた方がよい」（菅 前掲, p94）

修験と比較しそれ以前からの民間の個別的な漁撈儀礼に、より強い伝統性を認める言明である。その強い伝統性は、筆者の理解の範囲でいえば時間を遡及する意味ではなく、不変の、あ

るいは類似した生息環境のもと、文化的適応として繰り返し継起した社会の構造的な営みである、と今のところいうほかはない。

謝辞

小稿の執筆にあたり、以下の方々に御世話になりました。記して謝意を表します。

植月 学、岡村道雄、加藤 竜、菊池徹夫、木下哲夫、小林圭一、児島恭子、坂口 隆、新堀聡子、菅原哲文、鈴木菜穂子、高橋 務、高橋 学、高橋龍三郎、西田泰民、西脇対名夫、三原裕姫子、山崎 健、湯尻修平、渡邊裕之

註

- (1) 雄物川と玉川との合流点近くがサケ漁に適していたことは、すでに平安時代の記録からもうかがえる。近くの古代城柵、弘田柵跡の外郭北門周辺の低地部からは、物産の動検を示す「六月廿九日動鮭…」と記された木簡（第83号木簡）が出土している（児玉 1998）。
- (2) 歴史を考察する上で文献史料のみに依らず、考古学や民俗学の成果をも積極的に入れようとした喜田は、
「わが国の文化の進歩は、…（中略）…部分的、地方的に明るいところが出来ていても、その光はまだそう遠方を照らすには至らず、またとい近い所であっても、またまなんらかの物の陰になっているような場合には、その光が届かないで相変わらず暗黒世界であったというような時代が、相当長く継続したはずである」（喜田 1929、傍点筆者）と、文化の跛行性を認めた。「文化の進歩」「文化の光」「暗黒世界」などの表現の適否は措くとしても、文化には「なんらかの物の陰になっているような」と形容される外の影響が及びにくい側面もあり、より本来的な形や意味を保ってそれを伝える地域は確実にあると考える。歴史やそれを構成する文化の主体を無名な「民衆」と考えた喜田には、それが見えていたのだろう。
- (3) 弥生時代以来の稲作農耕に対し、漁撈活動には縄紋時代以来の伝統が残ることが指摘されている。先史時代からの漁撈の歴史を動物考古学の立場から論じた鶴泉岳二は、三浦半島の漁子遺跡の漁具や魚骨の分析から夏に回遊してくるカツオの漁期が稲作の農繁期に重なることをあげる。そして、漁撈技術集団と稲作農耕民とが集落内でそれぞれ共存した可能性を述べ、前者が縄紋時代以来の系譜に位置づけられることを指摘した（鶴泉 2008、p128）。
- (4) 三室遺跡は戦前から地元の研究者、吉田森によって調査され、福井県の縄紋時代遺跡として著名な存在だった。ただし、田北が述べたような魚形が描かれていた石があるかは確認されていない（木下哲夫氏の教示による）。
- (5) Maringer が言及した石が、田北が述べた「福井県大野郡蓮羽（おそは）村礪崎部落後方面山」中腹のものと同じかどうかは確認できていない。
- (6) 2007年5月12日に写真撮影・採拓、2008年12月19日に聞き取りした内容による。
- (7) 担当した中村氏は属まで同定する。鰐鼻状を示す5mmほどの歯の大きさ、中空、歯根のスポンジ形状を根拠とし、ともに出土した小型の椎骨は同一個体として尾部に近いものと考えたとのことである（2015年4月9日、電話確認）。本稿では後者の椎骨の評価が難しいと判断し、サケ科に包括し扱った。
- (8) 遺跡から出土する骨格部位に偏りがあった場合、魚であれば乾燥・燻製処理を行う際、解体場で腐りやすい内臓や頭部を切り落とし他所で処理し、運ばれたことが想定できる。それを実際のサケ骨出土遺跡のパターンに導入したのは松井章だったが（松井 1985）、そもそも骨格部位の残り易さが比重で示される骨密度との関係で一様ではないことに注目した研究がある（植月 2004）。サケやイワシは頭部よりも胴部の比

重が高いパターンに属する。

- (9) オロチョン族に近接するエヴンキ族にあっても、クマの内臓や肋骨は白樺や樺の枝にくるんで2本の松樹に掛けられ、最後には香り付けの煙を焚いて鼓の汚れを除くなど、風葬はきわめて手厚く執り行われる。「鄂温克人剥完熊皮后，把牠的头，食道，心脏，肺，肝连同各掌五趾及右上肋骨二根，下肋骨三根，左上肋骨三根，下肋骨二根，用桦树条捆好，并用柳条捆六道，头向东安葬在事先架好的两棵树中间的横梁上。安葬熊的树必须是枝叶繁茂的粗大的松树，把两棵树的里面削成平面，横刻十二道的沟，并用木炭，鲜血和各种野花的颜色，涂成五颜六色的横道面。在靠头树的第六道沟的两侧，砍出刀口，把熊的眼睛安上出，这些准备就绪后，参加的人们都要假哭致哀，并在上风处点燃火堆，用烟熏熊的尸首除污。」（秋 浦 1962, p94）
- (10) 縄紋社会の定住化に果たすサケ資源の重要性を、きわめて成層化した猟漁民社会である北米北西海岸インディアンとの比較で論じた高橋龍三郎は（高橋 2001）、定住したことよりもむしろサケ漁をめぐる複雑な儀礼体系の成立が契機となって成層化（階層化）が進むことを次のように指摘する。「食料が足りて、定住社会が訪れても、階層化はその理由では進展しない。その点で、カリフォルニア北半部は、堅果類に加えてサケマス漁撈や狩猟などの生業に取り込みながら生計を立てている。南半分よりも北半部のほうが社会の複雑化、階層化が進化したのは、単に生業経済としてサケマス漁撈や動物狩猟の経済活動が加わったからではない。それに付随する祭祀や儀礼、そしてそのノウハウの知識を持つ者と持たない者の格差が発現したことに改めて注目する必要がある」（高橋 2014, p640）
- (11) 類似の儀礼が新潟県三面川河口の瀬漁にある。「ジュウニヒレ」と呼ばれ、サケの目玉や青鱈、腹鰭、鰓蓋などを煮かきで作った舟に団子とともに載せ、終漁に近い12月14日の夜漁小屋に設けた水神に供えた後、翌早朝に海に流す儀礼である（赤羽 2006, p431）。
- (12) Guntherの示した北西海岸インディアンのFirst Salmon Ceremony地図には沿岸Salishに13の儀礼の分布が落とされている。
- (13) 筆者は日本列島本州北部の縄紋社会、とりわけ後期を中心にした時期の太平洋側内陸に、クマを中心にその他獣類を含み込んだ「獣性」を介して生き物と人とが一体の観念があり、日本海側のサケの遡上地帯には、同じ頃にサケと人とが靈魂の循環で交替するような世界観があったのではないかと予想的に述べている（小林 2012）。この空間的分布はGuntherの示した北米大陸での両者の分布、北西海岸側から見た沿岸と内陸との関係にもある程度認められるのではないかと。
- (14) Guntherの示した北西海岸インディアンのFirst Salmon Ceremonyには分布上大きく3つのまとまりがある。図8右の図では北側からHaidaとTsimshianにまたがるAグループ、KwakiutlとNootkaおよび沿岸Salishを含むBグループ、そしてChinookおよび以南のCグループである。13の部族はこのうちBグループを指す。なお、AおよびBグループではLundyの示したpetroglyphないし pictographの大きな分布との対応関係はわかるが、Cグループでの対応関係はわからない。Cグループでの対応関係の不明は注(10)引用の指摘にあるような、成層化の程度の低さに関わることであろう。
- (15) petroglyphの分布は北西海岸インディアンの季節的な移動居住にも関わるらしい。「彼らの氏族の本拠地は早春から秋にかけてサケの遡上する川の畔にあり、そこでサケの捕獲・乾燥、アザラシの尻脂、樹皮や植物の根の採集に従事し、後には簡単な農耕まで行うようになる。冬は採集場所に近い便利な場所か、社会的な暮らしが可能でできるだけ侵入者を防ぐことのできる村で過ごす。しかし、そのような場所にpetroglyphは必ずしもある訳ではなく、明確なのはやはりサケ川の河口近くで漁の権利を主張する者らによって作られている」（E. L. Keithahn 1940, pp127-128）
- (16) 「異形石棒」と「青竜刀形石器」が同じ撈獲器具として、「鮭の大助郎」をはさみ南北に分布することは、図10のようなモデルで説明できよう。サケ遡上の生態系の上に「鮭の大助郎」と密接に関係するサ

ケを捕獲し撲殺する文化伝統が成立する。新潟・山形を中心に残るナヅチ・タタキボウの撲殺木棒の伝統であり、この文化伝統の両極に「異形石棒」「青竜刀形石器」の石製儀器が縄紋時代中期末以降に登場する。この象徴的器物は、一方で他の文化伝統すなわち、前者では中期彫刻石棒、後者では同じく中期と目される「棍棒形石器」(野村・杉浦 1978)との関わりが考えられるが、撲殺木棒との関係で民俗周圍論的分布(小野 1996, pp3-27)を背景に登場することは、「鮭の大助譚」がそれと重なることでより明確である。民俗周圍論は文化人類学の年代領域仮説(age-area hypothesis/Wissler, C 1923)と同様、時間的な概念を含みこむ。しかし、考古学での型式編年ないし科学的測定年代の時間概念とは次元が異なり、その接合は開拓されないままにある。



図10 「異形石棒」「青竜刀形石器」「鮭の大助譚」「ナヅチ・タタキボウ」の周圍論的モデル

引用・参考文献

- 赤羽正春 2006 『ものと人間の文化史 鮭・鱒Ⅱ』法政大学出版局
 荒川隆史ほか 2004 『青田遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第133集
 大飼智夫 1954 「アイヌの鮭漁に於ける祭事(一)」『北方文化研究報告』第9輯, pp79-90
 植月 学 2004 「縄文時代における魚類の解体と保存加工」『動物考古学』21, pp17-33
 上野輝弥 1981 「附編2 貝層内検出の遺存骨」『杉沢台遺跡・竹生遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第83集
 内田武志・宮本常一 1975 「雪の出羽路」『菅江真澄全集』第5巻 未来社刊
 内田武志・宮本常一 1978 「月の出羽路」『菅江真澄全集』第7巻 未来社刊
 大場登雄 1957 「第四章第二節」『上原』長野県埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ, 上原遺跡調査会編
 大場登雄ほか 1963 「長野県東筑摩郡四賀村井刈遺跡調査略報」『信濃』第15巻第12号
 小野重朗 1996 「序章 民俗研究の方法」『南日本の民俗文化Ⅹ 増補農耕儀礼の研究』pp3-22
 加藤 竜 2010 『智者鶴遺跡』秋田県文化財調査報告書第454集
 金子浩昌 1979 「大畑台遺跡出土の脊椎動物遺体」『大畑台遺跡発掘調査報告書』日本鉱業株式会社船川製油所
 金子浩昌 2000 「小山崎遺跡出土の動物遺体」『分布調査報告書(26)』山形県埋蔵文化財調査報告書第200集
 神岡町 2002 『神岡町史』
 菊池徹夫・高橋龍三郎・熊林祐充 2004 「北米北西海岸部の比較考古・民俗学的研究—縄文文化社会複雑化過程の解明のために—」『史観』第150冊 早稲田大学史学会編
 喜田貞吉 1929 「日本における史前時代の歴史研究について」『史前学雑誌』第1巻1号
 喜田貞吉 1931 「秋田県下に見えられた魚の石面刻文に就て」『秋田考古学会誌』第3巻5号
 工藤利幸・中川重紀ほか 1982 『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書 盛岡市 萩内遺跡』岩手県埋文センター文化財調査報告書第32集

- 黒澤一男 2003 「第3節 ヲフキ遺跡の骨同定」「ヲフキ遺跡」秋田県文化財調査報告書第352集
- 黒澤一男 2005 「第5章章Ⅳ 柏子所Ⅱ遺跡出土動物遺体の同定」「柏子所Ⅱ遺跡」秋田県文化財調査報告書第398集
- 黒澤一男 2011 「第5章第5節 動物遺体の同定」「漆下遺跡 第4分冊 自然科学分析・まとめ篇」秋田県文化財調査報告書第464集
- 見玉 準 1998 「弘田遺跡 一第110次～112次調査概要一」秋田県埋蔵文化財調査報告書第280集
- 小林 克 2009 「『サケ石』を訪ねて」「縄文人の祈りの道具—その形と文様—」日本の美術No.515至文堂
- 小林 克 2010 「武蔵鉄城「石器打込研究」をめぐって」「秋田県埋蔵文化財センター 研究紀要」第24号
- 小林 克 2012 「クマと土偶とシャマンと」「平成19年度～平成23年度文部科学省私立大学学術高度化推進事業「オープン・リサーチ・センター整備事業」東北地方における環境・生業・技術に関する歴史動態的総合研究 研究成果報告書Ⅰ」東北芸術工科大学 東北文化研究センター
- 佐竹義和 1811（文化8）「千長田の記」秋田県公文書館整理番号20-13
- 沢田敦・折井敦ほか 2007 「道下遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第174集
- 設楽博己 2008 「一 縄文人の動物観」「人と動物の日本史1—動物の考古学」西本豊弘編, pp10-34
- 神野善治 1984 「蕨人形のフォークローア—鮭の精霊とエビス信仰—」「列島の文化史」1
- 菅 豊 1994 「呪具としての魚印棒・呪術としての魚印行為（アイヌ編）」「動物考古学」第3号, pp21-42
- 菅 豊 1995 「呪具としての魚印棒・呪術としての魚印行為（日本本編）」「動物考古学」第5号, pp39-68
- 菅 豊 2000 「修験がつくる民俗史—鮭をめぐる儀礼と信仰—」吉川弘文館
- 関根達人 2006 「菅江真澄が描いた「縄文土器」と「土偶」」「真澄学」3, pp62-75
- 高橋龍三郎 2001 「総論」「村落と社会の考古学」、現代の考古学6, 朝倉書店, p40
- 高橋龍三郎 2014 「三 縄文社会の複雑化」「縄文時代（下）」、講座日本の考古学4, 青木書店, p640
- 高田秀樹ほか 2006 「真盛遺跡2006」能登町教育委員会
- 高山 純 1976a 「配石遺構に伴出する焼けた骨類の有する意義（上）」『史学』第47巻4号
- 高山 純 1976b 「配石遺構に伴出する焼けた骨類の有する意義（下）」『史学』第48巻1号
- 滝沢規朗ほか 2011 「長瀬遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第224集
- 田北謙也 1954 「日本の一農村におけるキリスト教の変容」「民俗学研究」第18巻第3号, p220
- 土田勇人 1983 「鮭の大助考」「昔話と妖怪—研究と資料—」第12号
- 寺崎裕助ほか 2005 「昼塚遺跡・江添遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第147集
- 鶴泉岳二 2008 「二 漁撈活動の変遷」「人と動物の日本史1—動物の考古学」西本豊弘編, pp119-146
- 鶴泉岳二 2009 「5 動物・昆虫遺体 A 動物遺体」「野地遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第196集, pp169-171
- 富樫泰時 1995 「青竜刀形石器」「縄文文化の研究」9, 雄山閣出版, pp197-205
- 中村賢太郎 2010 「第3節動物遺体同定」「智者館遺跡」秋田県文化財調査第454集
- 名取武光 1960 「網と釣の覚書」「北方文化研究報告」第15輯
- 新津 健 1985 「縄文時代後晩期における焼けた獣骨について」「日本史の黎明」
- 西本豊弘 1999 「第2節ST639谷の第Ⅳ層・第Ⅴ層から出土した動物遺体について」「池内遺跡 遺物・資料篇」秋田県文化財調査報告書第282集
- 西脇功名夫 1991 「青竜刀形石器ノート」「北海道考古学」第27輯, p81-92
- 野村 崇・杉浦重信 1978 「根棒形石器について」「物質文化」No.30, pp1-9
- 野村 崇 1985 「北海道出土の青竜刀形石器とその系譜」「論集 日本原史」吉川弘文館, pp303-327

- 野本寛一 2005 「柄と餅 一食の民俗構造を探る」 岩波書店, p207
- 橋本 正 1976 「御物石器論」『大境』第6号, pp1-44
- バリノ・サーヴェイ(株) 2006 「表2 骨類同定結果」『小山崎遺跡第12次発掘調査報告書』遊佐町埋蔵文化財発掘調査報告第5集
- 深沢多市校訂 1971 「羽陰史略」『新秋田叢書』1, 今村義孝編
- 福田友之 2012 「青森県の貝塚」
- 藤本美夫 1977 「サケを漁る太古の人々—サケ文化への序論」『消えた縄文人』産報デラックス99の謎 2-3, p72-74
- 松井 章 1985 「「サケ・マス論」の評価と今後の展望」『考古学研究』31巻4号
- 増田町 1997 「第五章 三 増田にみるキリシタン禁制」『増田町史』, p541
- 水沢敦子 2012 「長野県における縄文時代の漁撈とサケ・マス論の展開」『長野県考古学会誌』143・144号
- 武藤鉄城 1939 「魚形彫刻石と供養碑—三」(秋田魁新報 昭和14年9/22・23・26)
- 武藤鉄城 1940 「秋田郡邑古蹟」アチック・ミュージアム叢報
- 武藤鉄城 1948 「秋田キリシタン史」
- 武藤鉄城 1954 「鮭石遺跡発掘報告」矢島町教育委員会
- 武藤鉄城 1956 「秋田県下の魚形線刻石」『石器時代』3
- 山内清男 1964 「日本先史時代概説」『日本原始美術1 縄文式土器』講談社
- 山内清男 1969 「縄文文化の社会」『日本と世界の歴史第1巻 古代(日本) 先史～5世紀』学習研究社
- 山崎京美 1994 「第4節 動物遺存体の同定」『白坂遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第244集
- 山崎京美 1998 「第9節 虫内I遺跡出土の動物遺存体について」『虫内I遺跡 本文編』秋田県文化財調査報告書第274集
- 山崎京美・平口哲夫・高橋理・久保和士・富岡直人 1998 「遺跡出土の動物遺存体に関する基礎的研究」平成7年度～平成9年度科学研究費補助金研究結果報告書
- 山崎京美 2000 「第4章第3節6 焼骨と骨角器」『戸平川遺跡』
- 山崎 健 2012 「2 六反田南遺跡Ⅳから出土した動物遺存体」『六反田南遺跡Ⅳ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第229集
- 山崎 健 2013 「生業研究としての焼骨の可能性—新潟県域を事例として—」『動物考古学』第30号
- 山崎 健 2015 「Ⅶ 神谷地遺跡から出土した人骨と動物遺体」『神谷地遺跡・小出遺跡』横手市文化財調査報告書第32集, pp452-457
- 山田晃弘 2005 「縄文時代のサケ」『東北歴史博物館研究紀要』6
- 渡邊裕之ほか 2003 「道端遺跡Ⅱ」新潟県埋蔵文化財調査報告書第127集
- 渡邊裕之ほか 2005 「道端遺跡Ⅳ」新潟県埋蔵文化財調査報告書第145集
- 渡邊裕之ほか 2009 「野地遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第196集
- 王宏剛・関小雲・黄強・高柳信夫他訳 1999 「オロチョン族のシャーマン」第一書房, pp179-188
- 秋 浦 1962 「鄂温克人的原始社会形态」中華書局出版
- ジェームズ・フレイザー／内田章一郎 吉岡晶子訳 1994 「図説金枝篇」, p66
- D・キュー P・E・ゴッダード／菊池徹夫 益子侍也訳 1990 「北西海岸インディアンの美術と文化」
- E. L. Keithahn 1940 "THE PETROGLYPHS OF SOUTHEASTERN ALASKA", *American Antiquity* 2, pp123-132
- Gunther, Erna 1926 "AN ANALYSIS OF THE FIRST SALMON CEREMONY", *American Anthropologist* 28, pp605-617

本州日本海沿岸北部における縄紋時代後半期の宗教儀礼 (小林克)

- Gunther, Erna 1928 "FURTHER ANALYSIS OF THE FIRST SALMON CEREMONY", *University of Washington in Anthropology* vol.2, no.5, pp129-173
- Hallowell, A. I. 1926 Bear Ceremonialism in the Northern Hemisphere. *American Anthropologist* 28 (1) : pp1-175.
- Lundy, M. Doris 1974 "THE ROCK ART OF THE NORTHWEST COAST", SIMON FRASER UNIVERSITY
- Maringer, J 1960 Vorgeschichtliche Ritzzeichnungen in Stein und Fels Nordjapans Die Fischgravierungen von Akita, *Anthropos* 55, pp425-440
- Wissler, C 1923 "MAN AND CULTURE", New York, Thomas Y. Crowell Company

(秋田県埋蔵文化財センター 〒014-0802 秋田県大仙市弘田字牛嶋20)